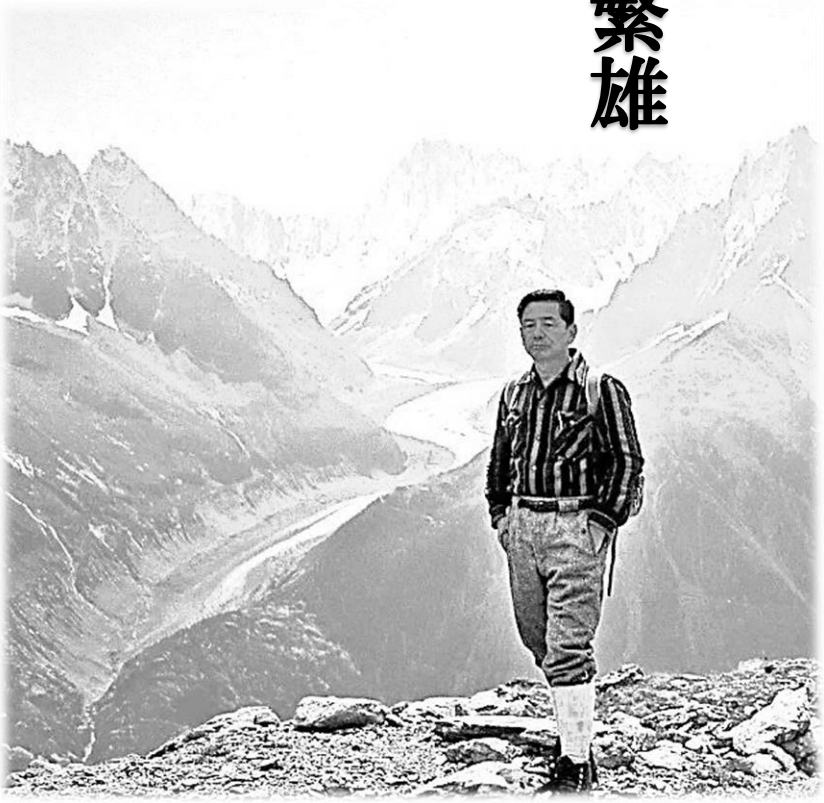
P.

18

2018·11

斎藤緑雨文化賞 協賛

特集 石岡繁雄



目次

文献から見る石岡繁雄
　石岡繁雄の志を伝える会　1

（一）作家井上靖氏とのかかわり
・「氷壁」　井上　靖
・石岡が井上靖氏に宛てた書簡
・毎日新聞夕刊

（二）登山家の萌芽　石岡繁雄
・山へのあこがれ　石岡繁雄
・初めての登山　石岡繁雄
・学生時代の思い出　石岡繁雄

（三）信念の軌跡
・序　今西錦司
・刊行によせて　井上　靖
・自序　石岡繁雄
・思い出の山旅　石岡繁雄
・墓参―ナイロンザイル事件の一断面―　石岡繁雄
・書評　田中澄江

『氷壁』のころ　石原　國利　36

石岡繁雄をおもう　小川はつこ　42

【表紙写真】フランス国立スキー・登山学校で講演後の石岡繁雄（一九七三年・シャモニーにて）
【本文中の挿絵】石岡繁雄が中学二年時の博物帳に描いたものを使用。

Profile

【石岡繁雄（いしおか　しげお）】

一九一八（大正七）年、米国サクラメント市生まれ。名古屋帝国大学工学部卒。戦後三重県鈴鹿市にて岩稜会設立、屏風岩中央カンテ初登頂。一九五五（昭和三十）年一月、前穂高でザイル切断により実弟を失う。これをきっかけに「ナイロン・ザイル事件」が発生。井上靖氏著『氷壁』の執筆を通して、井上氏との親交を深める。二十年間をかけてナイロンザイル事件の解決のため大企業や御用学者と闘い、その後も登山者の生命を守るため、登山用緩衝装置等の開発に心血を注ぎ、介護装置の開発に晩年を奉げた（四十七件の特許を取得）。豊田高専、鈴鹿高専教授、三重県山岳連盟会長などを歴任。石岡高所安全研究所所長。著書に『穂高の岩場（上・下）』『屏風岩登攀記』『ザイルに導かれて』『石岡繁雄が語る　氷壁・ナイロンザイル事件の真実』等がある。二〇〇六（平成十八）年八月没。

原稿募集

・小説・評論・エッセイ・詩歌など
内容は自由（取捨一任）
・枚数　2ページ以上（用談）
・組み方　3段または2段
・期日制限なし
・発行協力費　（用談）

・発行・編集世話人　麦畑羊一
〒512―8047
四日市市八千代台1丁目
1・139　伊丹方
電話・fax　059・337・1781
ケータイ　090・2572・8776
eメール　yoichi9356@gmail.com

★次号発行予定
19号　11月
20号　1月

あとがき

麦畑羊一

第7回「斎藤緑雨文化賞」は、故清水信氏と故石岡繁雄氏が受賞されます。石岡氏は山岳等の安全に関する論文・山行を中心としたエッセイ・ナイロンザイル事件と小説『氷壁』に関連した著述等，永きにわたる文筆活動に敬意を表しての受賞ということで、慶賀に堪えません。

石岡繁雄氏に関する私の知識は、井上靖著『氷壁』からと「ナイロンザイル事件」に至る経緯を報道した新聞等からしかありませんでした。そのため、「二十余年の歳月をかけて弟の無念を晴らした方が鈴鹿に在住してみえる」という程度のぼんやりした記憶しかなく、恥ずかしいことでした。

そんなこともあり、弊誌で氏の特集号を発行するというお話をいただいたときは二つ返事でお受けした次第です。

ゲラを拝見した今、私の脳裏に浮かび上がるものがあります。山を愛し弟を愛し、そして奥様を愛された氏のお人柄。正義と真理を追究し、大企業や権威を相手に闘い通した氏の生き方、です。「その源は不屈の精神にある」、と私の記憶に書き加えることになりました。これは文筆活動の根底にも通じる教えではないでしょうか。

〒512−8047

文芸同人誌P.18号

発行日２０１８・１１・０１

発行・編集世話人　麦畑羊一

四日市市八千代台１・１・１３９

ＴＥＬ　０５９・３３７・１７８１

文献から見る石岡繁雄

石岡繁雄の志を伝える会

登山家・石岡繁雄は、物理学教授であり文筆家でもありました。彼が残した数多くの業績の中に、その人となりをうかがえるものは多いのですが、ここでは文献の面からみていきたいと思います。〔　〕内は、石岡繁雄の志を伝える会の注釈です。

（一）作家井上靖氏とのかかわり

石岡繁雄は、ナイロンザイル事件、小説『氷壁』を通して、井上靖氏との親交を深めました。

井上靖氏は、そのエッセイ集である『穂高の月』に石岡の名を数回登場させています。

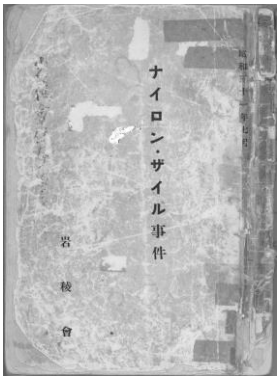
そのひとつ、「氷壁」を以下に掲載します。

「氷壁」

井上　靖

私は「ナイロン・ザイル事件報告書」〔「ナイロン・ザイル事件」〕を読むまで、ナイロン・ザイル事件なるものについては全く知らなかった。

事件は昭和三十年一月二日朝起きていた。三重県岩稜会の石原国利、若山五朗等三人の学生が穂高東壁をアタックしている最中のことである。頂上直下で、トップに立っていた若山が岩にザイルをかけ、岩壁を登ろうとしてスリップしたが、その時当然体を確保すべきザイルが簡単に切れて、ために若山は吹雪の中に顛落して、遭難死するに到った、こういう事件である。



わら半紙に，手書きでガリ版印刷された冊子「ナイロン・ザイル事件」(B5 判310頁)

ここで問題になるのは、この時使用していたのは麻ザイルよりも強いとされているナイロン・ザイルであるが、それが僅かの衝撃で切れてしまったという事実である。ナイロン・ザイルに欠陥があるのではないかという見方もできるし、ナイロン・ザイルが簡単に切れる筈はないから、むしろそれを使った若い登山家の方に問題があるのではないかという見方もできる。切れた、いや切れる筈はないと論議を巻き起している事件であった。当然なことながらザイルのメーカーの方も黙っているわけには行かず、ザイルの強度試験を、公開実験の形で行ったりして、ナイロン・ザイルを守った。大勢は問題を起した若い登山家たちの方に不利であった。

「ナイロン・ザイル事件報告書」〔「ナイロン・ザイル事件」〕の筆者は遭難者の兄の石岡繁雄氏で、自分の弟の死を無駄にしたくないという気持から、事件の真相を世に問い、ナイロン・ザイルに欠点があるに違いないということを強調したものであった。

私は登山家ではないので、雪の穂高で起った事件について、いかなる判断もくだすことはできなかった。小説に取り扱うにしても、第三者として事件を客観的に書く以外仕方ないと思った。

しかし、この私の考えを完全にくつがえしたのは、安川茂雄氏の紹介で、事件の渦中の人物である若い石原国利氏に会い、その人柄に打たれたことであった。

――でも、実際に切れたんですからね。

という短い言葉を繰り返しているだけの青年の眼には、いささかの濁りもなかった。私は氏の言うように、ザイルは切れたのに違いないと思った。作家としては、この眼を信ずる他はなかった。

下山事件で若い二人の新聞記者を信じたように、ナイロン・ザイル事件では石原国利氏を信じたのである。遭難者の兄である石岡繁雄氏もまた、この石原氏の眼を信じているのであろうと思った。

私は「氷壁」という小説の主人公を、石原氏の立場に置いた。

もちろん小説では事件と無関係な物語が展開して行くが、その中でナイロン・ザイル事件を正面に据えて、石原氏の立場から書いた。

小説「氷壁」とは別に、ナイロン・ザイル事件はその後幾多の曲折をくり返したが、ついに昨年、事件から二十一年目に、漸く石岡繁雄氏の主張が全面的に容

れられることになった。ナイロン・ザイルに安全基準が設けられることになったのである。これは新聞各紙に報じられ、〝二十一年目の真実〟と題しているものもあった。

「氷壁」という作品が文学作品としてどれだけの価値を持つか、作者の私には判らないが、ナイロン・ザイル事件の解決には多少の役割を果したのではないかと思う。

それはともかくとして、「氷壁」を書いたお蔭で、小説執筆中はもちろん、その後もたびたび穂高に登っている。前穂も、北穂も、奥穂も、登っている。去年も、一昨年も、出掛けている。大抵石原国利氏もいっしょである。先年、氏に付添って貰ってヒマラヤ山地に入り、四〇〇〇メートルの地点まで行ったが、これも「氷壁」を書いたお蔭である。

（昭和五十二年一月十四日・日本経済新聞「私の履歴書」）

小説『氷壁』の連載にあたり、井上靖氏は真摯な態度で石岡、石原から聞き取りを繰り返しました。しかし連載が始まると、そのストーリー展開に対して石岡にはある種の歯がゆさが生まれます。そんな思いをつづり井上氏に宛てた書簡が残っています。便箋二十二枚に及ぶ長文ですので、一部を抜き出します。

井上靖氏に宛てた書簡〔抜粋〕

一九五七（昭和三十二）年四月一日付

『氷壁』を拝見しておりまして、時々お手紙差し上げたい衝動にかられますが、先生のご執筆に悪影響をもつのでないかと考えやめておりました。

この事件のもつ意味を大衆が知ることによって、大衆自らの目覚めと、今後の予防をはかることが必要と考えます。

後者のためには、一般には新聞がニュースとして取り上げてくれる以外にはない訳ですが、しかし紙面に限度があり、このような複雑な事件は到底意をつくさない恨みがあると考えていましたが、突如天から授か

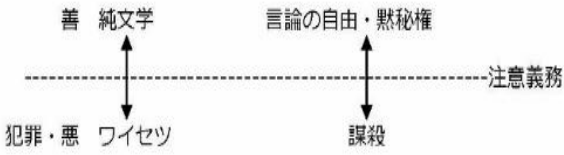
ったような先生の『氷壁』によって、この困難な目標が一挙に解決されようとしており、誠に感激にたえません。

いずれにしましても、事件のキーポイントとなる検察庁の態度と、先生の『氷壁』とは、この事件を社会的に生かすための車の両輪であると考えています。

さて、この事件のもつ社会的な意味の一つが、注意義務の危機であると考えたのは、最近判決のありましたチャタレー裁判の模様を新聞で読んだときであります。田中裁判長は「法律は道徳の最低線を守るものである」と述べてみえます。

純文学とワイセツ罪の境界線をあの場所に引くのでなければ、ワイセツというものは単に見解の相違となって、事実上なくなってしまうと裁判長は考えて、〔略〕この線の引き方が妥当かどうかは別として、そういうことが必要なときがあるということを感じました。

今度の場合、言論の自由（死因はザイル以外にあるとか、ナイロンザイルは鋭い岩角にも強いとかいう全く誤った新聞発表の結果に対し、その結果が誤りだと知っていて何故それを言わなかったかという質問に対し「あれは強い方の実験で、弱い方は相談してからにしようと思った」。これは毒入りの茶を、毒の入っていることを言わずに、毒が入っていないということを見せて、…後で何故毒の入っていることを云わなかったかという質問に、後で相談しようと思ったというのと同じ…また長越さんのいわれた大阪T氏の「何もいう義務はない。論説の自由だ。黙秘権だ」とか、生命に関する品物の販売で「新製品が出た時は、優れた点だけが強調される」とか、現在の登山界のナイロンザイルの性能に関する誤りに対し「今後ザイルを売る際には、注意する必要を認める」とかいったことが言えるという言論の自由）と謀殺（使えば切れるザイルを欠点のある事をいわずに勧めて殺人の目的を達する）との間のどこに、線を引くかということが問題になると考えるのですが、今回の事件で「弱いことをいう必要はない。登山者がナイロンザイルの欠点で墜死しても、実験の見方が悪いのだ」という言い訳が通るようならば、も



はやすべての謀殺は「言論の自由」で片づけられ、大衆の生命は守り切れないと考えます。

どんな犯罪でも説明次第によっては、見解の相違で別に犯罪にならないという可能性はあります。善と悪の間に線を引くことは難しいが大切なことと考えます。

もしも今回のこの事件で線が確立再認識されなければ、今後このような事件は次々発生し、おそらく追及されることはなくなると思います。つまり今後、このような大資本家、学者を相手に戦う者はいなくなると考えるからです。

自分たちのことを云うのはおかしいのですが、このような恐るべき相手に対して純粋に社会のためという目的で、数十万円の犠牲（私たちには大きいと思っています）と心身の浪費をするようなバカなものが、今後出ないように思われるからです。おそらくメーカーの誘いの手にのって妥協してしまうのではないでしょうか。

私たちはこの事件は、民主主義を守るための天王山だと考えています。

この事件がウヤムヤになれば、この注意義務の道徳は、有名無実として危機に瀕すると考える次第であります。

今回の事件を小説として取り上げていただくことの問題点は、先生が先日言われましたように「目下進行中の事件だからできるだけ事実に基づいてやりたい。そうでないと一方を不当に傷つけることになる」。換言すれば、万一そういう場合、先生ご自身に名誉毀損によるモンチャクが発生しかねない点だと思います。先生に名誉毀損の訴えを起こす可能性はメーカー以外にはありませんが、全日本山岳連盟に提出したパンフレットの内容を社会が知れば、誰しも憤慨せざるを得ないもので、このことはメーカーも知っているはずです。したがってメーカーとしては、事を大きくしないように押さえつけ、事件を虚空のこととして無視することだけしか出来ないはずで、また私としまして、この事件の発展状況によっては、つまり非常に不利になった場合には、業務上過失致死による告訴を、誠に不本意ながら起こすつもりでおります。

さて、小説の筋について感想を述べさせていただきます前に、私としまして『氷壁』に対する願望を記させていただきます。

（1）名誉毀損による石原の訴訟の理由が、一般社会

はもちろん、山岳界にもまるでわかっていないようでありますので、その点を知らせていただきたい。

（2）　生命の尊重、とりもなおさず注意義務の強調。

（3）　社会指導者の使命。多くの人々の良心をマヒさせてゆくのは、かかる社会の指導者のキマグレの非良心的な行いにあるといえます。そういう人々の社会的責任の大きさを強調していただく。

さて、『氷壁』の筋について、全く事実に従って追ってゆくとすれば（私としてはそれ以外に脳がありません）『氷壁』で実験を当初は佐倉製綱がするはずでしたが、最近（特に4月1日のあらすじ）常磐大助がするようなふうに書かれてありますので、一体どうなることかと私たちは心配しております。

〔書簡ではここに、具体的なセリフや場面設定など石岡の提案が十三項目記されています。その中から、⑦⑬の二つを記します。〕

⑦　魚津、又白テントで公開実験を報じたK新聞を見る。〔略〕

魚津、実験はインチキだ。手品だと叫ぶ。捜索の協力者は魚津を狂人視し、捜索隊の活動は弱化し、捜索は打ち切られる。〔略〕

⑬　常磐、八代教之助に会う。八代、あれは強い方の実験だと言う。弱い実験は魚津と相談してから発表するつもり。もちろん事故条件で切れるということは、当初からわかっていたと言う。商品というものは優れた点だけを発表するものであると言う。

常磐、普通の商品ならばともかく、命に関するものでは、それは困る（ミルクの例をとる）。ザイルだから問題なのだ。一体登山者の生命はどうなるのだと詰め寄る。

要するに『氷壁』の結びは…

八代が矛盾をカバーせんとして、必死に闘う姿。〔略〕

大衆の生命の擁護と、真実を守ることを頭にかざして追求する。

とてもややこしくて、小説にはなりませんでしょうが、要するに以上は、事実に沿って並べただけで、たわいのないものです。

いずれにしましても、朝日が小説という形で取り上

げてくれたのは刺激を弱めて最良の方法と考えております。もちろん、それに先立つものは先生の御勇気で、今更でもありませんが敬意と感謝に言葉もない次第であります。

加藤富雄氏も、今回は山行で誠に残念でしたが、いつにてもお手紙でも、またはお目にかかりたいと申しておりますので、当地へおいで願えればもちろんやって来ることと思います。神戸（かんべ）は海に近く、若松のカレイは有名でありますので、是非ご試食願いたいと存じます。母も最初は、この事件には大反対で狂人のように止めておりましたが、先生の『氷壁』が出てからは、打って変わって愛想が良くなり、先生に一度おいで願えれば光栄だと、常に申しております。

以上、ご多忙の先生にくだくだとつまらぬことばかり並べて申し訳次第もありません。多分に重複しておりますので、もう一度清書すべきですが、ちょっと疲れてご容赦ください。

四月一日　　石岡繁雄拝

井上靖先生

追伸〔略〕

この書簡については、毎日新聞夕刊「凱風快晴夏山をゆく①」（二〇〇七年八月八日）に掲載された記事があります。「文化・批評と表現」欄の半分を占める長文なので、関係部分だけを以下に抜き出します。

鈴鹿を訪れた井上靖氏と石岡（1968）

毎日新聞夕刊「凱風快晴夏山をゆく①」〔抜粋〕

「多くの人々の良心をマヒさせてゆくのは、かかる社会の指導者のキマグレの非良心的な行いにあるといえます。そういう人々の社会的責任の大きさを強調していただく」

これは、小説『氷壁』が朝日新聞に連載されていた１９５７（昭和32）年４月、作家の井上靖にあてられた長文の手紙の中の記述。差出人の石岡繁雄さんは、小説のモデルになったナイロンザイル切断事件の当事者である。

手紙は、作家に次々注文する。①～⑬と個条書きで以後の展開の希望を具体的に述べた末、「要するに『氷壁』の結びは……」と、結末部分の提案までしている。同じような手紙は他にもどっさり。

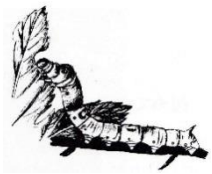
さて、石岡さんがこんな手紙を書き続けたのは、小説『氷壁』と現実の事件との間に重大な違いがあったためだ。

作家には実験の不正を説明し、十分な資料を託して連載を見守った。

だのに、メーカーや専門学者の不正追及がない。教授に当たる人物もさしてワルではない。描写は男女の人間模様に傾き、肝心のザイル切断の原因は最後までは っきりしない。はっきりさせないことで読者を引きつける展開……。

遭難の時、若山さんの隣でザイルを握っていた石原國利さん（76）は「井上先生は『事件の真相を離れ、素材として使わせてくれ』と言われた。こちらも承知はしたが、石岡さんは原因追求最優先で、『自分と同じ方向で協力してくれ』と言ってしまう。私も『蒲郡実験のインチキを書いてくれ』とお願いしてしまう。先生は『原因がわからなくて困っている主人公の立場を書きたいんだ。君たちの気持ちはわかるが、私の書いているのは小説だよ』と困った顔をされていた」と振り返る。

（二）登山家の萌芽



登山家・石岡繁雄へとつながってゆく彼の想いが伝わる三篇の文を紹介します。

はじめに紹介する「山へのあこがれ」は、昭和十五（一九四〇）年八月に次弟（ナイロンザイル切断により死亡した五朗の兄）を亡くした石岡が、名古屋帝国大学一年生のときに書いた未発表の作文です。

二つ目の「初めての登山」は、著書『ザイルに導かれて』に収められた自分史の一部です。

三つ目の「学生時代の思い出」は、名古屋大学電気学科卒業生の会報『ＦＵＴＡＢＡ』十六号（昭和五十一年一月発行）に寄せた文章から登山に関係した部分を抜粋したものです。

山へのあこがれ

こぼれそうに実った柿の色や甲高いモズの鳴き声にも秋の深さをそこはかとなく思わせるような午後、東に面した書斎の窓から眺めると取り入れ近い黄金の波が、点在する島のような人里を埋めて、果てしなく続いている。

東北の空、遥か地平のあたり、早くも頂に雪をまとった木曽御岳が柔らかな陽ざしをいっぱいに受けて淡紅色に輝き、神々しいまでに整った姿を透明な空気を通して聳立させている。それは私達幼い頃の憧れの的であり、夢の対象であった。

山の美しさを発見した喜びを兄に分かとうとして、今は亡き弟は幾度私を呼んだことであろう。私達の怒りも悲しみも淋しさも白雲のように聳えるこの姿によって、幾度慰められたことであろう。それは慈母となって優しく話しかけ、或いは厳父となって烈しく鞭打つのであった。

私達は、この地に生を受け共に成長し、物心を感じる年頃となり、兄弟という奇しき縁のもとに青春の喜びを分かち合ったのである。

まもなく弟も私も八高に通うようになり、私は登山に、弟は野球にそれぞれ運命の道を選んだのであった。もしどちらかが自己の選んだ定めのために、若い生命を犠牲にせねばならないとしたならば、それは危険な道を選んだ私自身でなければならなかったであろう。しかし現象は必ずしも確立の大きい方ばかりが現れはしなかった。

弟は最後まで自己の愛する部のために病を押しきって努力し、文字通り倒れた。以来、一年半、一時は病の床を離れ、私達の望遠鏡製作のため努力したけれども、再び床につき遂に立つことが出来なかった。

最愛の肉親を失った心の痛みは消えることなく、ことごとに涙をそそり、特に、変わることなく私達と共にあった御岳の山容を仰ぐ時、ひとしお胸にしみた。

弟亡き年の秋、私は飄然とただ一人静かに、亡き弟の霊と共にありたいと願いつつ黄金の波ゆらめく故郷を後にした。

車窓に展開する晩秋の飛騨路は、限りなく旅愁をそそる。寂寞の気は山間にみなぎり、幽愁の香は渓流にあふれていた。飛騨小坂で電車を降り、落合行きのバスに乗った私は、御岳への分かれ道に荷物のように置

き去られた。地図を広げ磁石を出して、生まれて初めて登る山の方向を定めて歩き出すと、もうそこには人間の香はなく、亡き弟とただ二人、あるのは燃えるような紅葉の山と紺碧の空とであった。

清浄な空気の香り、遥か尾根筋の梢をゆるがす木枯らしのすさび、ワラジを通してひしひしと身に染む土の感触、すべては喜びの世界であった。

弟と語りつつ時間を忘れて歩いた。四肢に染む冷気と、山陰の暗さに驚いてふりむけば、残陽は彼方の山頂に名残りを留め、空は一面夕焼けして万象既に夜のとばりに包まれようとしている。やがて見出した小屋は谷間に向ってさしかけられ、少し壊れてはいるが夜露を防ぐには申し分なく、一夜の宿には思いもよらぬ幸運であった。

蝋燭に火をつけ、注意深く足を踏み入れる。まもなく、赤々と燃える炊事用のたき火の真闇の中には、なぜか人の気配さえする。

弟の霊ではないかと胸がはずみ耳をすませる。

やがて火は燃え尽き、わらじをぬぎそのまま横になった。寒さが背筋を通って容易に寝つかれない。突然どこから来たのか数匹のねずみども、寝ている周りをかけめぐり、足に触れ、頭に触れ、睡眠を妨げることおびただしい。起き出して再び蝋燭に火をつけ、取り散らした食糧をリュックに収め、天井の梁に吊り下げて再び横になる。鼻をつままれても分からぬ漆のような闇の中で、手を振り回してねずみを追っているうち、いつしか眠ってしまった。

目を覚ませば、すでに明るい。ねずみどもの姿もない。急に人間らしい気持ちになって、鼻歌交じりに食事の用意にとりかかった。下界なみに、飯を炊き味噌汁を作って床の上に並べると、傍らに置いたわらじまで食器の一部のように見えるのもおかしい。

一夜の宿を振り返りつつ、再び歩き始める。足の指先がしびれるように冷たい。途中、道が二分し、一方は新しい道が続き、他方は踏みならした旧道が回りくねっている。地図を広げて考えてみた。地図には新しい道は載っていない。しかし、旧道は地図の上では断崖の上を通っている。おそらく従来の道路の補修に耐えかねて、新しい道を別の所へつくったのであろうと思ったけれども、そのまま地図の道に従った。

果たせるかな、足下に数段の滝を望む懸崖にさしかかるや、桟道は落ちて道はずたずたに切れている。引

き返そうと思ったけれども、この程度の悪場には自信があったので無謀の仲間には入らないだろうと思って、岩のもろい急斜面にピッケルで足場をつくって通過した。

ほっと一息汗を拭って、しばらく歩くと新道に合してしまった。まもなく硫黄の香が鼻をつき、谷川の水は濁り、温泉近しを思ううちに眼前がぽっかりと開けて濁川温泉があらわれた。意外に大きく人気のないがらんとした家に、恐る恐る入ってみる。大きな湯殿に湯がとうとうとあふれ、緑の液体をたたえていた。これ幸いと早速裸体になって飛び込み、首までつかってじっと目を閉じれば羽が生えて天国にでも遊んでいるような気持ちとなる。

ここからは靴に履きかえてゆくと、まもなく雪があらわれ天に聳える大木の群も次第に姿を没し、遂にはハイマツのみとなり、やがて見渡す限り累々とした岩石の山となってしまった。

軽いラッセルをしながら九合目を過ぎ、飛騨側頂上へと向かう。温泉に入ったせいか、急に疲れが出て一歩一歩が非常に苦しい。七貫を越してはいないはずのリュックが妙に重く感ぜられ、このまま頂上まで続くかどうかさえ心配となる。

突然、視界が紅に染まったので驚いて立ち止まった。ああ、陽がまさに西の空、雲海の彼方に沈もうとしているのだ。私はリュックを置き、茫然と巨大な太陽の沈む光景に見とれた。永久に再び来ない今日の一日も暮れてゆくのだ。真紅の姿は、やがて最後の黄金の一閃を投げると、そのまま地平線に沈んだ。見る見るうちに周囲は暗くなり、たちまちにして星が輝き始めた。三千米の高さにおける生やさしくない寒さが、突如として襲いかかってきた。私はあたりの暗さに追い立てられて立ち上がり、星の光の下に再びあえぎあえぎ苦しい登高を続けた。

やがて、飛騨側頂上、五の池小屋に倒れんばかりにしてたどり着いた。しかし、私はリュックをはずすことも忘れ、そのまま飛騨側頂上の祠をめざし石段のようになった岩片の一つ一つを踏んでいった。私には何か急に、そこに弟の霊があるのだと漠然と考えられたからであった。そして暗黒の中で、永い祈りを捧げ、再び戻って小屋の扉を開け内に入り込んだ。

懐中電灯をたよりに五の池に下り、薄氷を破って水をくみ上げ寒さに手を震わせながら汁をつくり、昼の

残りの飯をかみくだいた。

翌朝は靴の凍結に弱らされた。五の池に下って、ピッケルをふるって氷を砕いたが、意外にも昨夜のうちに底まで完全に凍って一滴の水すら求められない。雪を溶かすのも面倒であったので、朝食はやめて歩くことにした。

乗鞍も穂高も木曽駒ヶ岳も、夜明けの空に美しく浮かび上がっていた。烈風は絶えず身体を動揺させ、骨までも凍る思いであった。青緑に結氷した二の池の対岸には小さな雪崩の跡があった。

私は山頂にて遥か故郷の方を望み、寒さにまとまらない頭をしいてまとめて弟のことを思い、故郷から見たこの山のことを思い出しつつ、肉体的には甚だ苦しい若干の時間を過ごした。

帰路は王滝口に選び、茫々と草の生えた御岳スキー場を通り、道路の両側に無数に並んだ石碑の間を下った。私には、三十度登山、五十度登山と記した人々の気持ちが初めて分かるような気がした。その人達は、この山の崇厳さを信仰し、ただ帰依することだけを思って同じ道を何回も何回も登る人達なのであろう。石碑にあたる木枯らしは蕭々として、あたりのしじまを震わせていた。

地球の皺に過ぎない山は、人間とどういう繋がりを持つのであろうか。また、その山に登ることは何の意味があるのだろうか。とりとめのない思いが、回り燈籠の如く巡りあってとどまる所を知らず、次々と湧いて消え、消えては湧いた。近頃思い出すこともなかった幼い頃の友の顔、楽しく遊んだことなど、夏の夜の夢の如くに明滅した。しかしやがて、亡き弟の在りし日の様子が再び浮き上がってくると、忽然として現実にかえり新しい涙を催すのであった。

まめの出来た足を引きずりながら王滝の郵便局長のお宅を訪ね、ここで泊めていただくことにした。

自家発電による直流の電灯の下で、主人の話に耳を傾ける。中でも、熊狩りの経験談は興味深い。熊は引っ張ることを知って押すことを知らない。だから熊のいる穴を見つけたならば、村人を呼びにゆく間、この熊が逃げ出さないように熊穴の入口に長い棒を一本立てかけておくそうである。人々が得物を持ってやって来ると、熊公、棒を押せば外へ出られるのに、夢中で引っ張っている。人々を見て穴の奥へ逃げ込んだ時、木の枝でも何でも棒で押し込んでやると、熊公はこれ

を引っ張っては尻の後ろへやる。どんどん入れてやると、遂に出てきてしまうと。何か笑い切れぬものを感じながら聞き入った。

翌朝、バスに揺られ、木曽福島駅から再び車中の人となった。帰ってみると、黄金の波はいたる所刈り取られ、地は一変して黒い土となり、脱穀機の動く収穫の騒々しさが野に満ちていた。

やがて人里は豊年の祝い酒に酔い、地は凍り、万物は荒涼とした冬景色へと変わってゆくのである。まもなく、伊吹颪に乗ってちらちらと雪が舞い、木曽御岳は幾日も幾日も吹雪の中に麗しい姿を隠してしまうことであろう。

初めての登山

私が育ったのは濃尾平野の真っ只中で、西に低い多度山と東北には御岳と木曽駒ヶ岳の連峰が見えるだけで、言わば、山とは関係の少ない地域であった。初めて山といえるところへ行ったのは、湯の山温泉へ父が連れて行ってくれた時で、御在所の裏道を登り始め、すぐ右折し蒼滝の上へ出た。近づくとゴーゴーと音を立てて幅五メートル高さ十五メートル程の滝があった。私は滝を初めて見たのでビックリした。滝の幅はいくつかに別れ、その間に黄色い岩が出ていた。その何本かの岩の筋につかまって登れないかと一生懸命目を動かしていた。もう、その時から、岩登りには興味があったように思う。

次の本格的な登山は、中学四年生の時、私はいとこと色々と相談していたが、父は言下に「危険だから止めておけ」と言った。しかし諦められず、名古屋のデパートでおもちゃのピッケルと四本爪のかんじきを買い求め、また、白馬岳の案内書を買った。父もついに諦めて、案内人を雇っての登山を許してくれた。

津島から名古屋へ、また中央線で松本へ大糸南線で信濃大町へ（大町には後に切断したナイロンザイルを収納したが、当時はそういうことになろうとは夢にも思わなかった）、大町の旅館で山の案内人を紹介され、二両連結の汽車で北へ向かい、白馬の登山口の駅で降り、歩き始めた。

まもなく大雪渓にかかる。長さ数キロメートルの真夏の大雪渓にはまったく驚いた。大雪渓にはいたる所、

クレバスと称する亀裂があり、半日かかって登っていくと急な小雪渓があり、今夜泊まる村営小屋があり、その上の稜線に出たとき黒部の谷の向こうに立山、剣岳の雪を置いた山脈が並び、私はその光景を見て後、夜も昼もその光景がちらつき、山の魅力の虜となってしまっていた。

八高山岳部に入ってからは岩登りに興味を持ち、困難な岩を登っているときだけが、生きがいと感じるようになった。私は八高の文科から理科に移ったが、その時、鶴舞公園の近くの伯父の家に下宿した。入試のための準備は済んでいたので、私は歩いて十分程の公園に通った。そこには高さ二メートル程の青黒い岩があり、その岩には垂直のなめらかな部分とか、大小の岩の割れ目があった。わたしはその岩を何十倍にも拡大して想像し、どの部分をどうして登ればよいか、ハーケンはどこへ打つか、確保用のザイルはどこへ掛けるかなど時間を忘れて眺め続けた。私はその時がこの上もなく楽しいのであった。後年の屏風岩を登る原因、また、弟が墜死する原因の遠因はこの辺にあったような気がする。

学生時代の思い出

〔略〕幼稚園から大学まで一貫して通用する標語に〝よく学びよく遊べ〟というものがある。このことから、生徒・学生のタイプの分類が可能になる。前者に重点を置く者、いわく〝ガリ勉〟とか〝カマボコ型〟であり、後者に重点を置く者、いわく〝ドッペリ〟とか〝低空飛行〟である。もちろん、〝よく学びよく遊べ〟というのは両立の意味であろうが実際はそう簡単にゆくものではない。冷静なること氷のごとき科学の世界にでも測定値のバラツキを示すガウスの曲線があるくらいだから、まして生身で自由を重んじる人間では偏りはむしろ当然であろう。

以上、もって回ったような言い訳の仕方をしたが、要するに私のように〝よく遊ぶ〟ことに偏重した人間が発生したのは、それは私のせいではなく、メンデルの遺伝の法則とか、ガウスの法則とかという高邁な理屈がしからしめたものであることを、まずもって思い出していただきたい訳である。

しかしそのように遊ぶことにかけては自信をもっていた私であったが、それにもかかわらず一番堪えたこ

とがある。それは父が、そういう私に愛想をつかしたに違いない。野口先生だったか、篠原先生だったか忘れたが「息子に学校を続けさせても、到底ものにならないから、退学させて丁稚に出します。」と申し込んだ時であった。ガウスの法則も親バカには通じないことが分かって、私はその後二ヶ月ぐらいは〝よく学ぶ〟方へ重心を移したように覚えている。〔略〕

さて登山は、私の遊びの主体であって今はそれが本職でもあるかのように、ほとんどの時間がその関係に費やされている。当時、私は駒井君、武藤君、黒田君、田川君、吉永君等とよく山に出かけたが、以下は駒井君と一緒に登山した思い出話に限定したい。私は登山にかけては自分で言うのもおかしいが、当時、雄名を轟かせていた八高山岳部にあって、それこそみっちりやったので、いわゆるベテランに属しよう。しかし、他の学友はズブの素人である。ズブの素人を山へ連れて行くのは気疲れもするし、装備の調達など実際に面倒なことが多い。それをどうして誘ったかと言うと、誰しも他人を自分の好きなことに誘いたいという心理がある。

しかし、私の場合その他に、切羽詰まった理由があった。低空飛行にドッペリはつきものである。私は平素なら一回や二回ドッペってもかまわないと思ったが、当時は国民皆兵の世である（大東亜戦争は私達の在学中に勃発した）。ただし学生には徴兵延期制度があった。しかし、ドッペルと、それが効かなくなる。そうなっては大変なので試験の成績だけは、まあまあにしなくてはならない。ところが、私のノートはほとんど白紙なので、テスト前には誰かのノートを借りて読む必要がある。そのためには、平素のサービスが肝心というわけである。

いずれにしても私は、山行きを決心してくれた学友のために、靴、アイゼン（靴に着けるスパイクのようなもので、氷雪での滑り止め）、ピッケル等を昔の岳友から借り受けた。また、当時食糧不足であったので、ハム、バター、カンパンなどを調達するため店頭の長い行列に加わった。

駒井君との登山は四回記憶がある。今それらを詳しく記そうとしても、描写力のない私のペンでは読むに堪えないものとなる。そうかといって経験だけを並べたのでは本人には分かっても第三者に分からない。そこで四回のうちの二回について印象の強い部分のみ詳

しく記すことにした。

昭和十六年四月二十四日から三十日にかけ、駒井君と黒田君と三人で奥穂高岳から、当時難コースとされていたジャンダルムを往復する計画を立てた。今考えると、よくこんな無謀な計画を考えたものだと我ながら呆れる。しかし幸いなことに終始快晴で、小事故はあったが怪我もせず、予定通りの山行きが出来た。

四月二十四日の夜行で名古屋を出発、二十五日、上高地に入る道は雪崩でズタズタに切れているので、沢渡という最後の部落から歩く。約十二キロ歩いて、ところどころ雪が消えて地肌の出ている上高地に入った。上高地は閑散としていて、私は人に出会った記憶が無い。二十六日午前中は田代池など上高地内を散策、午後約七キロ歩いて徳澤の小屋に泊まった。

二十七日、梓川にそって登っていったが、しばしば川を覆っている雪の上を歩かざるをえない。どの辺りだったか忘れたが、足の下の雪が大きく陥没し、三人のうち二人が冷たい川の中に落ち込んだ（あるいは私の記憶違いで陥没したのは別の山行きのときだったかもしれない）。梓川と別れ、固い雪が足の下十メートル以上に積もった横尾谷を、汗をかきかき登ってゆく。左上方には、当時登攀不可能と言われた直立六百メートルの屏風岩が聳えている。私は六年後にこの大岩壁を、二人の少年を連れて初登攀することになるが、そのときはそれについて何のひらめきもなかった。膨大な雪原、涸沢の池の平をつめると穂高小屋に続く急な氷雪の尾根の下に達する。ここで私は、二人の靴にアイゼンを結んでやった。生まれて初めてのアイゼンを履いて、あの急斜面を登る二人の、懸命の形相が今でも瞼に残っている。

信州と飛騨の堺に位置する穂高小屋（二九九六メートル）は、ほとんど雪に埋まり、小屋の中は真っ暗で懐中電灯の光を頼りに歩き回る。カンに入った布団を引張り出したが、布団はいたるところ氷結していた。この日の夕焼けは、私の山行きでも、もっとも素晴らしいものの一つであった。前穂高と笠ヶ岳の純白の姿が神々しかった。しかし、この前穂高で十四年後に私は弟を亡くし、また私はそれからナイロンザイル事件という複雑な事件に取り組むことになろうとは、もとより誰も知る由もなかった。

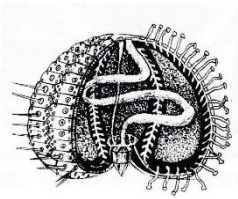
翌二十八日、三人はザイルを結んで奥穂高に向った。標高三一九〇メートル、日本で三番目に高い頂上から

の展望は素晴らしく、雪をかぶった中部山岳地帯には目指すジャンダルムが怪奇な姿を屹立させている。奥穂からジャンダルムへのコースのうち、悪場はロバの耳と称する大岩峯にくっついた舌状の一枚岩の通過である。現在は長い鎖が、岩壁に打ちこまれた太い鉄棒に取り付けてあるが、当時はなにもない。往きはそこが登りになり、私が氷雪の急斜面にピッケルで足場を刻みながら登り、後続者に対しては、上からザイルで引張って登ったので何ごともなかったが、ジャンダルムの頂上に達したその帰り、この下降で一波乱起きた。

先頭を下る駒井君が、目のくらむような飛騨の谷を見下ろしながら、氷のはりついた一枚岩を、岩角や、登りのときに刻んだ氷の足場につかまりつつ、ジリジリと下る。その後ろで黒田君が岩の突起に足をのせてザイルを繰り出す（ザイル操作は、穂高へ来る前に御在所の岩場で十分練習しておいた）。最後に私が、黒田君の三メートルほど後ろで、万一駒井君が滑落したとき黒田君が引きずり込まれないように、黒田君をザイルでしっかり確保していた。

駒井君が空中に突き出た一枚岩の下端まで下降し、その下端を右の方へ移動しようとしたとき、駒井君は足を滑らせ、たちまち駒井君の下半身が空中にぶら下がった。私が黒田君に「ザイルを引張れ。引張れ」と大声で怒鳴る。もともと私が怒鳴っても怒鳴らなくても黒田君はザイルを引張るしかなく、必死になって引張っている。結局駒井君は、しばらく足をばたつかせていたが、どうにか前の足場に這い上がることが出来、事なきを得た。

翌二十九日は天長節で、私達は「雲に聳ゆる……」を大声で歌いながら上高地へと戻ってきた。上高地のホテルの番小屋で、やぐら炬燵に入り、いっぱいやりながら、ロバの耳で必死になったときの三人の状況を、ああでもない、こうでもないと言いながら一枚の絵に仕上げた。〔略〕



（三）信念の軌跡

石岡の軌跡は、著書『屏風岩登攀記』（碩学書房一九七七年改訂版と、あるむ二〇〇七年復刊版）に詳しいのですが、その中から　①序文　②本文よりの抜粋　③書評をご紹介します。

今西錦司氏、井上靖氏、著者本人による序文と、少々長くなりますが本文に収められた「思い出の山旅」「墓参―ナイロンザイル事件の一断面」、そして田中澄江氏による「書評」です。

初版本（碩学書房 1949 年刊 ·B6 判 260 頁）

山への想い、ナイロンザイル事件に対する信念等をご理解いただけるでしょう。

序

今西　錦司

穂高の中心涸沢の表玄関にそそり立って、山麓を行きかうアルピニストたちを睥睨する屏風の大岩壁は、戦前の登山界において、登攀不可能の象徴ででもあった。

しかるに昭和二十二年夏、本書の著者石岡君は、二人の少年を連れてこの屏風岩を完登したのである。そのときの記録は『屏風岩登攀記』（昭和二十四年発行）として公表した。

あの井上靖氏の小説『氷壁』のモデルとなったナイロンザイル事件をご存知だろうか。遭難者はこの石岡君の実弟である。私はくわしいことはしらないが、この事件と取りくんだ彼のヒューマニズムを高く評価している。

いずれにせよ、彼が若き日に挑んだ屏風岩の登攀は、わが国における屈指のアドヴェンチャーであり、本書の出版は、この異色ある山岳ドキュメントを再評価するうえで、まさに時宜にかなったものといえよう。

昭和四十九年四月

刊行によせて

井上　靖

石岡さんは名アルピニストであると共に、志を持った数少ない登山家の一人である。私は氏の実弟の遭難事件をモデルにして『氷壁』という小説を書いているが、私に『氷壁』の筆を執らしめたものは、事件そのものよりも、寧ろその悲劇を大きく登山界にプラスするものであらしめようとする氏の志に他ならなかったと思う。

屏風岩完登の壮挙は日本山岳界の大きい事件であり、言うまでもなく氏の不屈な闘志によって成就されたものであるが、氏によって為されたということが大きい意義を持つものではないかと思う。氏は記録を造る人でなく、山に志を刻む人であるからである。

自序

石岡　繁雄

拙著『屏風岩登攀記』は、昭和二十四年に発行されて以来、四十九年それに今回と版を重ねてきました。ふり返ってみますと私はその度に、醜いものを吐き出し、結局、気がついたときには、五臓六俯をことごとくさらけ出していました。

私の最初の登山は、中学四年のときの白馬岳でした。そこで私は山の美しさと雄大さに打たれました。高等学校では岩登りを教わり、山の厳しさとそれに接するときの生命の高ぶりを知りました。それ以来私は、山の魅力のとりことなり、獏のようにその夢を食べつづけてきたように思います。

山は、その美しさと厳しさが織りなす綾錦を形成し、無数の美徳と教訓を提供してくれているはずであり、従って私は、それに深く影響されるはずでありました。またむろんそれが私の山への期待でもありました。

しかしながら私の歩いた道には、そういうものよりはむしろ、暗くて悲しい人間の葛藤や、ナイロンザイル事件のように、社会との闘いといった全く異質のものが、大きな位置を占めております。

そして本書は、版を重ねる度に、当初の意志に反して、そういうものが影を濃くしてしまったのでありま す。

いま私は、山生活四十年をふり返って、山と私との妖しいえにしを反芻しながら、自分にとって山とはいったい何であったか、という思いにかられております。

読者諸氏が、私の山生活の総決算ともいうべき本書から、私の体験を超えて、山のすばらしさと山のなんたるかを、いささかでも読みとって下さるならば、望外の幸せであります。

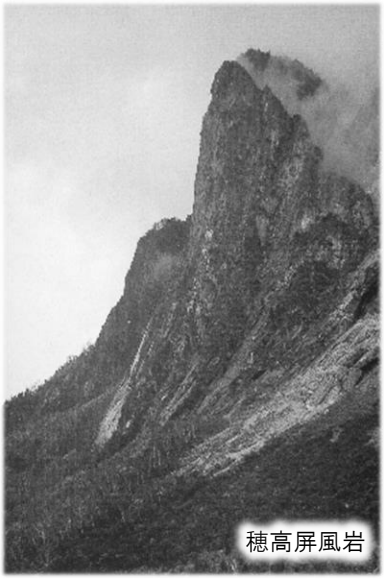
思い出の山旅

石岡　繁雄

矢も楯もたまらなくなって山へ出かける、うっとりと夢うつつに山へ登る。だが私はなぜ山へ登るのであろう？　人間はいったい何のために山へ登るのであろうか？

これはすべての山男たちにたいしても、また私自身のうちにも、幾千回となく投げかけられた疑問である。その時によって、あるいは答える人によって、それぞれの解答は与えられはしたであろう、しかし、けっきょくは答えられない疑問である。それを言葉で表現した時、山男の胸にはなにか割りきれないものが残ることであろう。この矛盾に私は長い間苦しめられてきた。そして今日では、ひきょうな逃避かもしれないけれども、その解答を見出そうと苦しむことが、馬鹿らしいことであるかのように思われてきた。

登山というのは、しょせん「行」（タート）の世界である。その意義をいかに「言」（ロゴス）の世界に求めてみたとてむだである。生きることの意義や、生存の目的をいかに言葉達者にしゃべってみたとて、それで立派な人生が具現するとは限らない。むしろ黙々と強くたくましく生きることにこそ立派な人生があるように、登山もその「行」の集積の上にいっさいの疑問が


穂高屏風岩

解決されるのではあるまいか。

登山とは何か？　この問いに最も雄弁に答えるものは登山の歴史である。あるいは、一人の登山家の生涯である。マンメリーの一生、ギドレイの生涯、あるいはメルクルの生涯は、彼らが登山の意義について語った片々たる言葉の何百倍とも知れぬ力強さをもって、私たちに、登山そのものの何たるかを教えてくれる。

ここにおいて私も、小さいながら一人の登山家として、屏風岩に登攀するまでにたどってきた道を書き綴ることによって、この疑問にたいする私なりの解決の仕方を求めたいと思うのである。

墓参　―ナイロンザイル事件の一断面―

石岡　繁雄

弟に報告を

十一月初めの連休には、原色の服装をした男女の群で都会なみにぎわった上高地であったが、九日ですべてのバスがストップするとともに観光客はまばらとなり、眼前に聳える雪化粧した穂高連峰にも、梓川の両岸にびっしりと並んだから松の梢に宿った霧氷にも、冬将軍の訪れが感じられる。今各旅館は、戸を釘で打ちつけたり板のすきまに目ばりをする閉鎖の仕事に忙しい。それがすめば、夏場の住人は、降りしきる雪に追いたてられるように下山し、上高地は無人の、純白の世界へと変身する。

私たち三十数名の一行は、営林署の許可を得て八台のマイカーに分乗し、梓川の右岸、穂高連峰の麓の大密林に設けられた凍結した一本道を上流に向かって走った。上高地から約八キロで新村橋のたもとに着く。ここで自動車道はなくなった。私たちは自動車の群を後に残し、雑草のため見えがくれする登山道を、きわめてゆっくりとした足どりで、さらに上流に向かって歩いた。一行の中には杖にすがって歩く七十八歳の私の母がいた。また戦後の、屏風岩をはじめ穂高の峰々をかけ回った仲間のほとんどが参加していたが、その中には手を引いてもらって、つまずきながら歩く盲目の、かつて屏風岩で活躍した豊田がいた。さらにテレビカメラを背おったＮＨＫの取材班三名と朝日新聞の記者一名がそれに続いた。

私たちの目的は、ここから約三キロ先の前穂高岳の

山麓にある弟五朗の墓（茶毘の地）に詣で、弟の死が原点となって発生したナイロンザイル事件の結末を報告することである。そのころ三重大学生だった五朗は、昭和三十年一月二日、二人の仲間とともに当時積雪期未登攀の前穂高東壁を登攀中、頂上直下で足を滑らせ、頼みのナイロンザイルが切断、墜落行方不明となったのである。

密林の中を進むこと約一キロ、とつぜん林がなくなり荒涼とした河原が現われた。標高三〇九〇メートルの前穂高岳は、梓川に向かって幅約百メートル、長さ三キロほどの、大小の花崗岩が波とうのように畳々と重なった空谷を押し出しているが、それが眼前の〝又白の押出し〟と呼ばれている谷である。私たちは登山道から離れてその押出しを登る。

顔をあげれば、久しぶりに晴れあがった紺碧の空に、新雪をかぶった前穂高岳が、本邦第一級の岩壁群を左右に従えて傲然と聳え立っている。弟たちのザイルが切れたAフェースの上部の岩も、その直下三〇〇メートルにある遺体が発見されたB沢も、その途中の弟のピッケル――それは今私が握っているが――が発見された第ニテラスも、折から大滝山の上に昇った朝日をまともに受けてまぶしいばかりに輝いている。盲目の豊田は、前穂高の方向に正確に顔を向け、水晶のような冷たくすみ切った空気を気ぜわしげに吸いこみながら、前穂高の美しさが分ると話しかけてくる。

押出しを登ること約一時間、左手にこんもりとした森があらわれる。河原を離れて森の中の登山道を登る。ひとかかえ以上もある巨木がおり重なって倒れ、凄惨な風景となる。母や豊田をひっぱりあげたり押し上げたりしてそこを越すと急に視界がひらけ、ふたたび前穂高の偉容が現われる。足下には一面の地肌の岩屑を秋草の名残りがおおっている。登山道の右、三メートルと離れないところに、何十個かの石が高さ一メートルほどに積まれている。ケルン（積石）全体を苔がおおい、周囲の秋草の景色となじんでいる。私たちの一行はその前で停止した。目的地についたのである。

ケルンと豊田

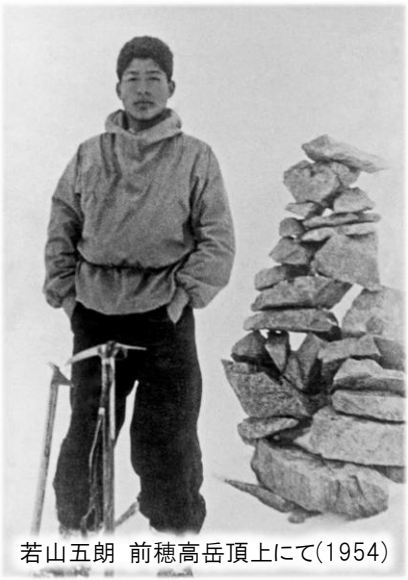
私は何度もここに来ているが、今日ここに集まった人の中には、初めてという人もかなりいる。その人たちは〝これが五朗ちゃんの墓なのか〟と目をしばたたかせながら、黙々としてケルンをかこんだ。その中で

黒目鏡をかけた豊田は、友に手を引かれてケルンに近よった。手がケルンに触れると、うずくまるように膝を折り、墓石を抱くようにしてかかえた。墓石の中央に埋めこまれた短冊ほどの大きさの銅板の表面を、彼のふるえる指先がはい、一字一字とさぐってゆき、やがてそこに〝若山五朗君〟の文字を読みとった。文字に顔をすりよせ、はげしく震える彼の姿を見ているうちに私は、豊田と弟は、二十九年四か月ぶりの再会であることに気づいた。私には二人が別れたときの状況が甦った。

昭和二十一年八月二十一日、伊藤、松田、豊田それに私の四名は、屏風岩完登の希望に燃えて、屏風岩を見上げる横尾の岩小舎に陣どった。二十三日、私たち四名が第一ルンゼで雨にあい、ずぶぬれになって岩小舎に戻ってみると、終戦のため復員したばかりの弟が、小学校五年生の末弟五朗を連れて、敗戦直後でバスもないので徳本峠を越してやって来ていた。五朗は、岩小舎の前に生えていた樹木の天辺を指さし「リスだ、リスだ」とはしゃいでいた。郷里では松田も豊田も、五朗をよく遊ばしてくれていた。とくに豊田は五朗を実の弟のようにかわいがっていた――豊田は五朗の得意の歌〝カム・カム・エブリボディ〟を盲人の鋭さで、今なお正確に覚えていて、五朗の話が出るたびに歌う。

その夜の岩小舎は、ゆらぐローソクの光の中で、屏風岩との対決の雰囲気とは似つかぬ柔らかさをかもし出していた。

翌二十四日午前中、衣服を乾かし午後ふたたび、松田、豊田、私の三人は、屏風岩横断ルートの偵察のため、第一ルンゼへ出かけた。弟二人も後からついてきた。第一ルンゼの、大小の石が畳々と続く押出しを登りながらふと、ふり返って見ると五朗は素足で歩いている。驚いて「運動靴はどうしたのだ」と聞くと「岩



若山五朗 前穂高岳頂上にて(1954)

小舎へ忘れてきた」と頭をかく。とりに戻るのもおっくうなのでそのまま登行を続ける。

谷底の岩肌が露出している第一ルンゼのとりつきで、私たち三人ザイルを結びながら、ルンゼを見上げると、五朗はルンゼの裾の急峻な岩壁を、素足でぐんぐんと登ってゆく。私は、ザイルをほうり出して追いかけ、引き下ろすと、復員してきた弟に「五朗を絶対に登らせるな」と厳命しておいて、私たち三人は登りはじめた。

第一ルンゼを三分の一ほど登った地点から横断ルートに移り、中ほどで足下をのぞくと、目もくらむような、はるか下の第一ルンゼの押出しを、弟二人が下りてゆくのが望まれた。豊田が「ヤッホー」を叫ぶと五朗のかわいい「ヤッホー」が返ってきた。これが豊田と五朗の、今生における別れとなったのである。

私たち三人が横断ルートから帰ってみると、弟二人は、また徳本峠を越すと伊藤に言い残して帰った後で、岩小舎はもとの静けさに戻っていた。

その後豊田は、ある日とつぜんベーチェット病に襲われて失明し、五朗は前穂高で墜落、生命を失ったのである。

三十年ぶりの、歓喜すべきはずの再会では、一人は生命を奪われ、一人は光を抹殺されていたのであった。

豊田の、止むことのない慟哭は、この世の無情と厳しさを示していた。二人の最後の別れとなった地、屏風岩は、二人の運命の再会を、知ってか知らずしてか、今このときも、目前の尾根のかげに、虚空を切ってそびえているのである。

ケルンと官報

やがて墓石の周りは清掃され、花・酒・果物・菓子が供えられ、弟が遭難した当時を示す写真とか、その後に展開したザイル事件の資料が並べられたが、それらの中央に、数頁のザラ紙の印刷物が置かれた。それはその年の六月五日と七日の官報である。無味乾燥の活字で埋められたこの印刷物ほど、この場の雰囲気にそぐわないものはなかった。しかしながらこの印刷物は、ケルンとともに今日の主役であった。世間をさわがせたナイロンザイル事件も、それから生まれた井上靖氏の『氷壁』も、すべてはこのケルンが原点であり、その前に置かれたこの印刷物が終着駅であった。ＮＨＫや朝日の取材班は、この印刷物の原点を求めて、は

るばる墳墓の地にやって来たのである。

山仲間たちは、弟の死の翌年死んだ父の写真とともに、ケルンを取り巻いた。ローソクと線香の束に火が移され、紫煙があたり一面を包んだとき、母と妻の称える読経が流れ始めた。遭難のときのパーティのリーダーであった石原國利と、私に代って若山家を継いでいる弟と、茶毘に加わったときは小学生で今は二児の母親となっている私の長女とが、ケルンの上から交代で酒をそそぐ。また全員交代で焼香をする。豊田も友につきそわれてそれにならった。酒は苔を浸しながらケルンに小さな流れをつくった。酒の滴が流れ落ちる断続的な音と、ＮＨＫのカメラが回る規則正しい音とが、読経と不協和音をなして初冬の又白谷に流れていった。

ナイロンザイル事件の回想

私は、数珠をかけた手をあわせて目を閉じた。読経の声が薄れてゆくのを感じたとき、私の脳裏には、二十年前の茶毘のときの光景が浮かび上がってきた。

三十年八月三日早朝から、上高地の木村小屋の長さんと榑（くれ）さんによって、当時うっそうとした密林であったこの場所で、から松の巨木が九本切り倒され、それが井桁に組まれ、二メートルほどの高さに積み上げられた。またその前には親類の人たちによって祭壇が設けられて遺体の到着を待っていた。

弟の遺体は早朝から多くの山仲間によってＢ沢の雪渓や松高ルンゼを下ろされ、待ちくたびれた医師と警官によって検死がなされ、問題のナイロンザイルが遺体に結ばれているのが確認され、写真撮影がなされた後、夜中一時頃、この密林の中の祭壇に運びこまれたのであった。

遺体は井桁の上に乗せられ、形ばかりの焼香をすますと油と火がかけられた。火はたちまち物凄い火焔となり、その熱で周りの巨木が、いたるところでパチパチと音を立てていた。折から満月が密林の穴の上に現われたが、渦巻く火焔に見え隠れし、焔の上で逃げ回っているようであった。それは弟を焼くというよりも月を焼き落している光景であった。

母が振ったリンの音に、私はわれに返り現実に引き戻された。私の目には、ケルンを取り巻く母や友の姿が映ったが、母の読経の音律が単調さにかえるとともに、目を閉じ、現実をふり切るようにして幻想の世界

へと入っていった。しかしこのときには茶毘の光景は消え去っており、それに代って二十年間のナイロンザイル事件の、もろもろの場面がつぎつぎにおしよせてきた。

昭和三十年一月三日、現場から救出され、スノーボードで上高地に下ろされた石原と沢田が語る遭難状況は戦慄すべきものであった。鉄より強いというキャッチフレーズでさっそうと登場したナイロン、そのナイロンで作られたザイル、太さは八ミリでもマニラ麻十二ミリの三倍強いと保証されたナイロンザイル、登山者の羨望の的であったナイロンザイルが、こともあろうに、九十度の岩角で、わずか五十センチ滑り落ちただけで、しかもなんのショックもなく切断したというのである。

ちょうどこのとき、旧臘の二十九日に東京のパーティが前穂高に隣接する明神岳を登っていて滑落、ナイロンザイルが、これまたなんのショックもなく切断したという話が、私に知らされた。私たちはナイロンザイル切断の原因を考えぬいた末、ナイロンザイルは引っ張りには強いが岩のエッジには弱いのではなかろうかという着想に到達した。ナイロンザイルと麻ザイルをナタで切り較べてみたが、麻は、鋸で切るときのように、ナタを往復させないと切れないのに、ナイロンはそうしなくても容易に切れたのである。

私は、遭難状況とナイロンザイルの岩角欠点という私たちの見解をまとめ、下山とともに新聞に発表した。また一月末には名大の土木の実験室でエッジを介しての引っ張りテストを行なったが、ナイロンザイルは石原報告の条件で容易に切断することが判明した。したがってナイロンザイルに従来知られていなかった岩角欠点があることは、もはや動かせない事実となった。

メーカー後援の追実験

ところが一方において、そうした事実を知らないで、いちずにナイロンは強いと信じ切っている人々は「ナイロンザイルは強い。遭難当事者は、第三者が見ていないことを幸いとして、自分たちの失敗をナイロンに転嫁したのであろう」と主張し、失敗の例として「ザイルをアイゼンで踏んだか、それともザイルは切れたのではなくて結び目がほどけたのであろう」という推定がなされた。しかもこの主張は大勢を占めるところとなった。

二月九日、日本山岳会関西支部の主催によるナイロンザイル切断検討会が大阪の朝日新聞で開かれ、その席上、同支部長で大阪大学応用物理学教授、登山用具の権威であるS博士は、ナイロンザイル切断原因の解明に着手することを発表された。

私はこの席上、名大土木科で行なった実験データを発表したが、肉親が行なった実験のためか何の反応もなかった。山岳雑誌『山と渓谷』はS教授の実験開始を予告し、すべてはS教授の研究結果を待つことになった。S教授の研究は、ザイルメーカーである東洋レーヨンと東京製綱の援助のもとで行なわれた。

私はナイロンザイルを購入した業者から、四月二十九日、東京製綱蒲郡工場でS教授の研究の結果が発表されると知らされた。私はその実験を参観したかったが、当時弟は行方不明のままで、私の実家では弟の葬式を出すことも出来ず、またザイルは切れたのではなくて、ほどけたのではないかという風評の中で、父母は疲れ切っていた。私は両親のためにも遺体の発見を急がなくてはならなかった。

四月末から五月にかけての連休は遺体捜索の貴重な機会であり、蒲郡の実験を見にゆくことは出来ない。それかといってS教授の研究結果が気がかりだったので、私は四月二十四日、仲間の伊藤経男と二人、大阪に出向いてS教授にお目にかかった。

S教授は私たちに「たまたまメーカーからの依頼があったのでその資金によって研究しているが、だからといって結果を誤ることは絶対にない。結論は蒲郡で行なう実験によって判明するはずであり、その内容はあなた方に有利であっても、メーカーに有利になることは絶対にない」と語られ、またその日、私たちをS教授に取り次いで下さったS教授の教え子であるM運動具店のS氏は「S教授の実験の結果、ナイロンザイルは横からの圧力に弱く、とくに八ミリナイロンザイルはマニラ麻十二ミリザイルの二十分の一の強度しかなく、ザイルとして不適当であることが判明した」と語られた。

私は憔悴し切っていた父にこのことを報告し、暗雲の払われる想いで弟の眠る穂高へと向かった。私たちは前穂高の中腹にある、雪におおわれた奥又白池の幕営地にテントを張った。そこは、元旦早朝、弟たちが出発した所である。捜索は深雪のため遅々として進まず焦慮の日々を送っていた。

五月三日、一緒に大阪に赴いた伊藤が後発隊でやってきた。伊藤は蒲郡実験を報じた五月一日付の中日新聞を私に渡した。私は雪の上でそれを読んだ。それには六段抜き〝ナイロンザイルは麻の数倍〟という見出しで「若山君の遺族や友人が穂高へ捜索に向った四月二十九日、東京製綱蒲郡工場でS教授によってザイルの実験が公開された。ザイルは若山君たちが使用したものと同一のもの等数種が用いられた。岩角は九十度と四十五度の二種類、実験の結果、八ミリナイロンザイルは石原発表と同一位置関係の落下衝撃で切断せず、また四十五度の岩角で三メートルの落下衝撃で切れなかった。前穂高の事故の原因は、ナイロンザイルの岩角欠点によるものではないかというウワサがあったがこの実験の結果、ナイロンザイルは岩角でもマニラ麻の数倍も強く従って前穂高の事故の原因はザイル以外にあるようだ」と記してあった。

生命を売る手品

私は信ずべからざるものを見て仰天し、周りの雪が紫色に変じた。私は「実験はインチキだ、手品だ」と叫んでいた。私にはこの手品のからくりがすぐ分った。岩角が面とりして丸くしてあったにちがいなかった。エッジの部分を一ミリ面とりすれば、ナイロンザイルは急に強くなる。このことは私の実験で分っていたのである。しかしこの実験をやっていない人には、たとえエッジの丸みに気がついたとしても、この程度の丸みがナイロンザイルを極端に強くすることになるとは想像できなかったであろう。

小さなナイフの先端の丸みの意味はわかっても、あの膨大な実験装置とS教授の実験という肩書きの下では、それに気付きそれを指摘する状態への移行はありえないであろう。それが手品の手品たるところである。いずれにしてもS教授は、石原発表が正しいことを承知せられながら、それが正しくないという印象を観衆に与えられたのである。

岩角が、穂高でみられる通常の岩のように、カドがギザギザであったり、シャープなときには、ナイロンザイルは容易に切断する実験を事前に行なっておられながら、またそのことが事故の原因であることを承知しておられながら、面とりした岩（一ミリの面とり、後日判明）を使ってナイロンザイルは事故条件で切れない実験、岩角でも強いとみられる実験を公開された

のである。

なぜ蒲郡実験前に行なわれた一桁弱い実験を行なわれなかったか、そのことに言及されなかったか。それこそが実験の目的である死因の究明と登山者の安全に役立つのではないか。この実験の目的は明らかである。ナイロンに弱点がないこととザイルメーカーに責任がないことを社会に印象づけることである。しかしそれは一般登山者の生命の犠牲の上になされたのである。企業が自社製品の欠陥をかくしたという例はあっても、一般社会人を、策をもって弱いものを強いと積極的にだましたという例を知らない。生命を売る手品を行なったということを聞かない。

さらに重大な点は、企業だけがそれをやったというのではなく、登山者の生命を守ることにつねに心掛けるべき日本山岳会の支部長が、また国民と真実の味方であるべき国立大学教授がその謀略に協力したということである。もしこの事件をウヤムヤにしたならば、この種の事件は防止できず生命尊重と人権擁護の精神が空虚なものになってしまう。私はこのとき、私の生涯をかけてもこの問題を追及する決心をしたのであった。それは、我慢するには、あまりにもひどすぎることであった。

私たちは遺体を発見できず、重い足どりで両親のもとに帰ったが、父のまわりには、ザイルがほどけたという雰囲気が支配していた。父は軽率な息子に代って社会に陳謝しなくてはならない状態であった。父のどうしようもない怒りが、私をウソツキとののしらせ、勘当せしめたのであった。父は翌年、村人の白眼視の中で病死した。

ところで、ザイルがほどけたということであれば、石原はザイルの先端を切ってザイル切断を偽装したことになる。リーダー石原は犯罪者（信用毀損罪）とみられるにいたったのである。著名登山家であるW大学のS助教授は雑誌『化学』に「自分たちの失敗をザイルに転嫁した不届者」と発表し、S教授の実験を予告していた山岳雑誌『山と渓谷』は、「ザイルメーカーは科学的テストによってナイロンザイルを保証した」と発表した。

私は、蒲郡実験追及の手はずを考え、それを実行にうつした。庭に高さニメートルの木製の実験台を作り、鉄製の九十度のエッジを固定した。それにかけた八ミリナイロンザイルは、十五・五キロのおもりを六十五

センチ落下させただけで確実に切断した。私はその実験を、訪れる人すべてに見せた。

事件の追及

弟の遺体にザイルが結ばれていない場合、追及が困難になるのではと心配したが、遺体は七月三十一日、東壁直下のB沢で発見され、ザイルは正しく結ばれていた。そのザイルの切り口は階段状をなしており、またザイルの切り口からは数多くの一定長さ(三センチ)の繊維束が離脱した。

八月六日の現場調査のとき、遭難当時のリーダーであった石原が指摘した岩角にはそれと同じ繊維束が二種類付着していた。吹けば飛ぶようなこの繊維束が七か月の風雪に耐えてザイル切断箇所を示していたことは、奇跡としか言いようがなかった。その岩角を石膏でとり、それによく似た岩角をさがし、巨木を使って前穂高のときと同一位置関係で実験したところ、麻ザイル十ニミリはほとんど傷つかないが、ナイロンザイル八ミリは容易に切断した。その切り口は前穂高のときと同様な階段状となり、切り口からは一定長さの繊維束がえられた。このことは理論的にも説明できることであり、ザイルが岩角で切断したことが確認された。

次にこの事件の追及には、S教授が蒲郡実験前に行なわれた二十分の一の実験データを入手する必要がある。これは極めて困難であろうと思われたが、奇しくも弟を荼毘にした朝、梓川畔で、たまたま登山にきた友人の加藤富雄氏から入手することができた。加藤氏は蒲郡実験を三重県山岳連盟の代表の資格で見学されたが、その帰路偶然の機会に、そのデータをS教授の実験を手伝った東洋レーヨンの社員から入手されたのである。また加藤氏はそのデータを隠しておくことはもしもこの後、ザイル切断事故が発生したとき彼自身犯罪になると判断し、そのデータをガリ版印刷して友人多数に配布され、それを私もいただいたのである。

十一月十八日、私は伊藤とともにそれらの資料をもってS教授にお目にかかり、蒲郡実験の訂正をお願いした。S教授は了承され、また十二月十九日、S教授からいただいた書簡には、ナイロンザイルは石原報告の条件で切断すると記してあったがその約束は実行されなかった。それどころか三十一年一月一日、日本山岳会発行の『山日記』に、蒲郡実験のときのデータが掲載され、ナイロンザイルは岩角でも麻ザイルの四倍

以上強い、と発表された。

私たち山仲間、岩稜会は訴訟によってでも真実を追求するという決議をなし、二回にわたる内容証明による会見申込みが断わられた後、時効の前日、S教授を告訴し、同時にいっさいの経過を記した『ナイロン・ザイル事件』(三百十頁)を発行した。ジャーナリズムはこれを大々的に報道した。告訴は不起訴となったがその後三回にわたる公開質問状による追及は、そのつど、新聞、ラジオに報道され、ついにS教授は三十三年十月に「蒲郡の実験は、グライダー、船舶の曳航縄に関するものであり、登山とは無関係である」と発表された。

しかしこれは明白な、万人の認める虚偽であり、ここに蒲郡実験の犯罪性が立証されたのである。私は、この結果をもって、この事件が先例となることは防止出来ると考え、三十四年八月「ナイロンザイル事件に終止符を打つに際しての声明」を発表した。ここに弟の遭難以来四年八か月を費した一連の事件は幕をおろしたのであった。(最近一か年の間の内部告発的な二人の出現によって、検察当局が明らかになしえなかった事実が明らかとなり、蒲郡実験はザイルメーカーによって計画されたきわめて非人道的な犯罪であったことが判明した。)

思えばこの事件は、日本の戦後高度成長期の初期に発生し、七〇年代の日本を先取りした形の進展を見せた。あの頃、公害という言葉も未だなく、企業の責任、研究者の学問に対する社会的責任は、高度成長路線の大名目の彼方に厚いベールにおおわれたままであった。私たちの、企業責任と研究者のモラルを問う闘いは、当然のことのように孤立無援を強いられ、私たちは多くの友人や肉親からも見はなされ、血みどろの苦闘が続いたのであった。

安全基準制定へ

ナイロンザイル事件はこのような結末のもとに終了し、その後蒲郡実験を報じた中日新聞と山と渓谷社は、蒲郡実験の手品としての性格が判明するとともに、私たちの会に対し「貴会の立場をあくまで支持する」という書簡をよせられ、同時にそれぞれの紙誌を通じて蒲郡実験の恐るべき真相が発表された。

しかしながら登山界でもっとも権威をもつ日本山岳会の『山日記』は、三重県山岳連盟および私たちの再

三の要求にもかかわらず訂正がなされず、ナイロンザイルは岩角でも強いという記事は残されたままであった。そのため一般登山界はナイロンザイルの性能に関してあいまいなままにあった。

昭和三十三年、穂高での二名の死亡につづいて三十八年剱岳で二名死亡の事故が発生した。いずれもナイロンザイルが切れていた。朝日新聞は三十八年八月「ザイルメーカーはザイルの生命に係わる弱点を明示すべきだ」という私の記事を掲載したが、メーカーにそうした動きは全くなく、従来通り、ザイルに添付されるカードにはたとえば、二・四トンに耐えるなど長所のみが強調された。

三十一年発行の『山日記』には、S教授執筆の「ザイルメーカーはザイルの長所のみを強調するものだ」ということが記されているが、ザイル業者はこの記事のために生命に係わる欠点を記さないということも考えられたので、三重県山岳連盟および私たちは、『山日記』のこの記事を、たとえば〝遭難防止のために業者はザイルの生命に係わる弱点を明示すべきだ〟と訂正していただきたいと再三にわたって日本山岳会に申入れをしたが、依然訂正への動きはない。

昭和四十五年六月十四日、拡張力二・八トンのナイロンザイルが同じ日に、異なった場所で二本切断、二名が死亡した。山岳雑誌『岩と雪』は〝ナイロンザイルの安全限界内での切断〟と発表した。どうしてこのような不可解なことが起きたか。それはS教授が、ナイロンザイルの岩角での安全限界は低いことを承知されながら、あたかも高いかのような実験を公開し、またそのデータを権威ある山日記に発表し、しかも訂正がなされないからである。私はふたたび立ち上がる決心をした。それはザイルメーカーにザイルの、生命にかかわる弱点を明示させるためである。三重県山岳連盟は私の意図に全面的に賛成、直ちに〝ナイロンザイル問題小委員会〟が設立され、四十七年六月「昭和四十五年六月十四日に発生したナイロンザイル切断による死亡事故の責任と、今後同種の事故を防止するために必要な措置についての見解」を発表した。

この見解を軸として登山界は急旋回した。日本山岳協会はこの見解を支持する決議をし、四十八年二月二十八日には内外のザイル業者を集めて、ザイルを販売するさいにはその弱点を明示するよう要望した。

このため東京製綱はザイルに添付するパンフレット

に、ザイルの岩角欠点を記すようになった。とくに八ミリナイロンザイルについては〝たとえ二重にしても岩登りには一切使ってはいけない。弱いので非常に危険です〟と記した。ここにおいて、二十九年の暮、保証付強力ナイロンザイルとして販売された同じザイルが、岩登りには使えないものとなったのである。思えばこのことは、三十年一月の事故直後の実験でザイルメーカーには判っていながら十八年間も秘密にされてきたわけである。いやそれどころか蒲郡実験では八ミリナイロンザイルはきわめて優秀であるという逆の実験結果が示されたのである。東京製綱とS教授は、その間に発生したナイロンザイルの切断に伴う死亡事故の責任を負わなくてはならないであろう。

同年三月十一日、私は鈴鹿市の鈴鹿高専で三重県山岳連盟としてのザイルの実験を公開したが、各地の山岳関係者、消防局、自衛隊関係者百三十名が見学された。観衆は一様に、眼前に繰り広げられたナイロンザイルの無残な姿に息をのんだ。

ナイロンザイルは岩角で弱いことが明らかであるのに、またナイロンザイル切断による死亡事故が続発しているのに、日本山岳会は山日記を訂正しようとせず、また大部分のザイル業者はザイルの欠点を示さないままであった。日本山岳協会は強制力をもたない以上、どうしようもなかった。しかし昭和四十八年六月、消費生活用製品安全法が制定され、国はザイルの基準作成に向けて三千万円を計上、やっと重い腰をあげた。私のザイル実験装置は急に活況を呈し、世界中のザイルが集められ、通産省の担当者を交えて連日実験がくりかえされた。かくして、世界で初めての、強制力をもったザイルの基準が、弟の死後二十年を経て制定されたのである。

ザイルの安全基準を掲載した官報は、いま私たちの眼前、弟のケルンの前で、太陽の光をいっぱいに受けている。私は司会に促され、弟の霊前に進んで、ナイロンザイル事件の、奇跡的ともいえる結末にいたる経過を報告した。胸の奥底からこみあげてくる熱い想いに、言葉はしばしば中断した。私の後、石原から遭難当時の感慨が切々と語られ、その後全

ザイルの安全基準交付を前に
石岡繁雄と妻敏子(1975)

員による「いつかある日、山で死んだら……」の歌声が、嗚咽を交えて前穂高に向かって流れていった。

難事件　重みいまこそ浸みわたる
墓石おおいし苔の厚さに

書評

田中澄江

著者の名は、三重岩稜会の会長であり、昭和三十年一月二日、前穂高で令弟を失い、その遭難死のもとなったナイロンザイル切断の原因について、二十一年もの間、メーカー及び、メーカー側に立つひとびとの間に、粘り強いたたかいをたたかい抜いたひととして忘れがたい。

令弟の不幸な死は、井上靖氏が『氷壁』に取り入れて、石岡氏の立場を支持しているのだが、そのたたかいの記録は遭難防止を願って、みじんの偽りも許さぬ激しさで貫かれていた。本書には、生命を守るべきザイルの不備によって落命した愛弟への痛恨をのべた墓参の記や、岩稜会によって初登攀された屏風岩中央カンテ登頂の手に汗を握るような克明な記録や思い出の山旅の記などをおさめている。

しょせん登山は「行（ぎょう）」の世界であるとする氏の山に対する姿勢は、限りなく謙虚に、絶え間なく未知への夢で燃え、かつ不屈の闘志をひそめている。それは私たちが人生という登山を生きるのとよく似ていて、登山への愛情を語る氏の筆は、深い人間への愛を語って胸を打つ。

（「毎日新聞」昭和五十三年三月十二日付）

石岡は、登山用はもちろん、じつにさまざまなザイルを実験に使いました。鈴鹿高専退官の際に高専より運んだ、実験に使ったザイルの山。（1983）

最後に

「石岡繁雄の志を伝える会」は、石岡の次女あづみと石岡の高専教授時代の教え子たちを中心としてスタートしました。現在では石岡を尊敬して外部から参加したメンバーもいます。

正義と真理を追究しつづけた石岡繁雄の精神を、私どもは受け継ぎ、各地での展示会や、ホームページ「登山家 石岡繁雄の一生」の充実を通じて、その志を広めようと活動しています。また、名古屋大学 大学文書資料室に寄託して、特定歴史公文書等となりました「石岡繁雄文書資料」の目録作りに従事して、石岡の遺しました資料群が多くの皆さまに判り易く閲覧していただけるよう目指しています。

今年は石岡の生誕百年にあたり、故人の生前の悲願であった篠田軍治氏（元日本山岳会関西支部長で、ナイロンザイル切断事故を事件にした御用学者）の「日本山岳会名誉会員取消実現」に取り組む決意でおりますので、皆さま方の賛同とご支援をお願い申しあげます。

今回、鈴鹿文学祭において斎藤緑雨文化賞を受賞することは、故石岡繁雄はもちろん、伝える会にとっても大変光栄なことであり、感謝の思いでいっぱいです。ご関係の皆様、誠にありがとうございました。

若山五朗のケルン墓参（2016）

『氷壁』のころ

石原 國利

石原國利(1930～)
滝谷第二尾根にて(1957)

【石原國利】福岡県直方市出身。「ナイロンザイル事件」当時の登山パーティのリーダー（当時中央大学四年）。井上靖著『氷壁』、魚津恭太のモデル。

ここに紹介する一文は、井上靖氏が少年時代を過ごした天城湯ヶ島町から依頼され、『追憶・井上靖』（天城湯ヶ島町ふるさと叢書第六集〈一九九七〉）に寄稿した石原氏の元原稿です。（石岡繁雄の志を伝える会）

『氷壁』のころ

石原　國利

井上靖先生と初めてお会いしたのは昭和三十一年（'56）九月の終りのことであった。石岡繁雄さん（岩稜会会長、名大工学部卒、「屏風岩登攀記」著）が上京、長越（安川）茂雄さん（日本山嶺倶楽部、早大文学部卒、「谷川岳研究」著）と会うことになり、私もよび出された。石岡さんと長越さんは初対面であったが、いずれも戦後（昭和二十年代）片や穂高、片や谷川岳で活躍した両雄として互いに畏敬する岳友であった。長越さんの指定した銀座の三笠会館の喫茶室で落ち合った。会うなり長越さんは「作家の井上靖さんが、『ナイロン・ザイル事件』を読んで、あなたたちに会って話を聞きたいと言われている」と言った。三人は銀座からタクシーを拾って、大井滝王子町の井上先生宅を訪

ねた。

「ナイロン・ザイル事件」とは、昭和三十年（'55）一月二日、私の所属する岩稜会の三人パーティが、積雪期未登の前穂高岳東壁の頂上直下で、約五十センチメートルの滑落でナイロンザイルが切断して遭難、石岡さんの実弟若山五朗君（十九才、三重大）が墜死し、私ともう一人の友人は生き残った。この冬私達と前後して二件、いずれもナイロンザイル切断による遭難が発生。ナイロンザイルは当時、それまで使用されてきた麻ザイルに比して、全ての点で優れているとされていただけに、大問題となった。三件の切断事故はいずれも、岩角においてザイルが切断していたために、私達はナイロンザイルは岩角で切断し易いと考え、石岡さんを中心に名大工学部と石岡さん宅に造られた実験台で実験を重ねた結果、ナイロンザイルが鋭い岩角に弱いことを確信、詳細を新聞、山岳雑誌等に発表した。わが国の登山界でもこの問題を重要視し、当時、登山装備の権威といわれた日本山岳会関西支部長（阪大工学部教授、応用物理学工学博士）篠田軍治氏が解明にのり出した。そして同年四月二十九日、東京製綱蒲郡工場において、多数の登山関係者、報道関係者を集めて、公開実験が実施された。この日私達は若山君の捜索のため穂高に入山していたが、公開実験に先立って行われた篠田氏と石岡さんとの会見で、篠田氏は全面的に石岡さんの実験結果（ナイロンザイルの岩角欠陥）を認めていたので、公開実験の結果に疑いの予測をもたなかった。

ところが、公開実験の結果は真実と正反対のものであった。新聞、山岳雑誌等はいずれも「実験の結果、岩角に弱いのではないかといわれていたナイロンザイルは、岩角においても麻ザイルより数倍強いことが証明された。岩角は90度、45度のものを使用。岩稜会が発表した遭難時の位置関係を再現した実験でもナイロンザイルは切断しない。」ここにおいてナイロンザイルは岩角でも強いということが、公に再保証される結果となった。早大理工学部応用化学助教授、山岳部監督の関根吉郎氏は雑誌「化学」昭和三十年七月号に、「2トンの荷重に耐える綱が、人間一人ぶら下がって切れるであろうか。……雪の山を登る時には鉄で出来たカンジキ（アイゼン、クランポン）をつけている。この爪でナイロンの綱に傷をつけていたのではあるまいか。……誰も第三者の見ていないところで起った失

敗であるから、当事者は出来るだけ、罪をナイロンに帰させようとする気持もわかるが……」と記した。

ところが日が経つにつれて、公開実験に使われた岩角は、秘かに角に丸味（アール2ミリ）がつけられていたことが判明した。私達はこれは登山者の安全にとって、由々しき問題だと危惧した。石岡さんは篠田氏に対して再三にわたって、公開実験の結果の訂正を発表するよう強く求めたが、誠意ある返事が得られなかった。ここに至って私達岩稜会は、登山界の安全と公開実験の欺瞞を明らかにするために、昭和三十一年六月二十三日私の名において公開実験の指導者篠田軍治氏を告訴し、岩稜会は同七月一日、関係資料97件を記した告発書「ナイロン・ザイル事件」B5版、310頁を発刊し登山関係者、報道関係者に送付した。長越さんに渡った一冊が井上先生の目に触れた次第であった。

井上先生は石岡さんと私の話を聞いてから「近く新聞に連載小説を書くことになっている。あなたたちの出来事を、小説の材料として使わせてください」と言われ、石岡さんと私は協力を約束した。

こうして私の井上先生宅通いが始まった。省線「大井町」からバスを乗りついで、滝王子町のお宅にうかがった。長越さんと一緒のこともあった。当時の私は登山に熱中していて、自由になる時間とお金は全て山登りに注ぎこんでいたので、文芸作品の読書とは全く無縁の生活で、井上先生は「闘牛」で芥川賞を受賞した清冽な文章を書く作家であるという程度の知識であった。

お会いした先生（四十九歳）は肩から腕にかけてガッチリした身体つきで、静かなる闘志を内に秘めた男性的な印象の方であった。「登山のことはわかりませんから、何でも教えてください」先生はこうおっしゃって、着物の腕をまくって大学ノートに、愛用の太字のシェファー万年筆に力をこめてメモしてゆかれた。ときには絵を交えて書かれた。「私は新聞記者をしていましたので、調べるということには苦痛を感じません」とおっしゃった。ものを訊くときの先生は、若輩の私どもに対しても実に丁重で、先生の識ることに対する謙虚なお姿に私は深い尊敬の念をおぼえた。聞いてその場でノートされ、「これでよいですか」と確かめられた。ときには私の下宿に電話がかかり「今書いたことを読みますから」とおっしゃって、「間違いありませんか」と念をおされた。

「氷壁」は朝日新聞紙上に十一月二十四日から始まった。全体の筋書きとして、前穂高でナイロンザイルが切断して遭難、ザイルの公開実験で主人公（魚津恭太）が不利な立場に立たされるというところは私達の事実に則して書かれ、人物設定等の構想は、長越さんと知己の登山家松濤明氏のエピソードをヒントにまとめられた。

松濤明氏（大11年～昭24年）は東京農大卒、関東の名門山岳会登歩渓流会所属で、戦後を代表する登山家の一人であった。昭和二十三年十二月から二十四年一月にかけて、積雪期未踏の槍ヶ岳北鎌尾根から穂高岳にかけての初縦走を計画、後輩の有元克巳氏とともに入山。深い積雪に阻まれて遭難、七月になって二人の遺体が発見された。遺体のそばの岩の割れ目に、防水紙に包まれた手帳が残されていた。登歩渓流会はこの手帳をもとに、昭和二十五年「風雪のビバーク」と題する報告書を発表、登山界に強い感動を与えた。それより抜粋すれば

一月五日　フーセツ　千丈沢ニスリップ、上リナホスカナキタメ共ニ下ヘ下ル、ラッセルムネマデ……

一月六日　フーセツ　全身硬ッテ力ナシ、何トカ湯俣迄ト思ウモ有元ヲ捨テルニシノビズ、死ヲ決ス……

有元ト死ヲ決シタノガ六時……今一四時仲々死ネナイ

漸ク腰迄硬直ガキタ、全シンフルエ、有元モＨＥＲＺソロソロクルシ、ヒグレト共ニ凡テオワラン……

「氷壁」の終末で、魚津恭太が北穂高岳滝谷で落石に撃たれて負傷、月光のもと死をむかえる状景が重なる。

話の途中で、いつも美味しいコーヒーをご馳走になった。先生はピースの缶からタバコを抜き出し、考えるような顔つきで静かに喫われていた。昼間からの話が長引いて夕食時間にかかったこともあった。先生が「うちでいっしょに食事をしませんか」とおっしゃって、お子様達と一緒の食卓を囲んだこともあった。ポークの水炊きに徳利からトクトクとお酒を大量に注ぎ入れ、「こうすると美味しいですよ。温まりますよ。たくさん食べてください」とおっしゃった。先生は横で燗をつけた酒をのんでおられた。

夜晩くなった日は、車を呼んで世田谷の私の下宿ま

で送ってくださった。車はまだ灯の少い時代の東京の暗闇の夜を抜けて行った。車のエンジンの音と、膝にかけた厚い毛布の重みの感触が今も残っている。因みに、深沢一丁目にあった私の下宿は代々続いた旧家で、三千坪といわれた屋敷には巨大な欅が聳えており、秋の終りにはフクロウが飛来して低い声で鳴いていた。この欅の群れは渋谷の東横百貨店の屋上から見ることが出来た。母屋は厚い藁葺きの屋根造りで、のちに東京都の文化財に指定されたと聞いた。学校を卒業（昭和三十二年）して数年後、井上先生原作の映画「あすなろ物語」を観ていたら、主人公鮎太（久保明）の住いとして私の居た下宿が映し出されたのにはおどろいた。人生は何か目に見えない糸で結ばれている思いがした。

「氷壁」が軌道にのりだした昭和三十一年の暮から三十二年の正月にかけて、私達岩稜会は北穂高岳に登山した。途中上高地の奥の徳沢で一泊、深夜山に向かって出発した。このとき私は冬の穂高の状況を手紙に書いて、所用で下に下る冬期小屋の番人（芳野満彦氏）にポストへの手紙の投函を依頼した。山から下って、冬山の写真を持って先生宅を訪ねたのは、松の内の気分が残っている正月の明るい昼間であった。その日は別の来訪者と重なった。先生が「気のおけない人ですから」と言われて同席した来客は女優の有馬稲子さんであった。有馬さんは先生の作品のなかで、特に「通夜の客」を演じてみたいというような話をされていた。そして先生といっしょに私の冬の穂高の写真を黙って見つめておられたが、しばらくして「何か、峻厳って感じね」と感想をのべられたのを憶えている。

「氷壁」の連載が進行する間に、私達が追及していたナイロンザイルの岩角欠陥は、ますます明確になっていった。私は先生に「事実は明白となりました。公開実験は弱いものを強いと見せた手品です。登山者の安全がかかっています。このことを「氷壁」のなかに書いてください」と訴えたこともあった。先生は「私が書いているのは小説で、ドキュメンタリーとか勧善懲悪ではないのだから」と、困ったような顔をされた。

しかし「氷壁」連載のおかげで、ナイロンザイル事件の存在が広く世に知られる事になった。事件として訴えるよりも、作品に取り上げられ、その作品の魅力によって思いも寄らない反響を呼ぶ、と言う貴重な体験を得た。「氷壁」の背景に、井上先生の暖かい眼差し

が感じられた。

やがて「氷壁」では魚津は独り北穂高滝谷へ向い、終末をむかえる。「氷壁」の連載が終りに近づいたころ、先生は次の作品の準備に入られていた。それは「天平の甍」であった。

昭和五十年（'75）四月、通産省は登山用ザイルに安全基準をつくり、パスしたS（安全）マーク付き製品以外はザイルとして売ってはならないことを義務づけた。私達が前穂高で使ったロープはザイルではないとされた。事件発生以来、実に二十年が経過していた。この事件の背景に、日本の主力産業の経済優先主義という不幸な時代があった。

「氷壁」を縁として、私達は井上先生との親交を得ることになり、カエル会の穂高山行にも参加するようになった。カエル会とは「氷壁」に出てくる上高地明神の小池に群がる蛙から命名された、井上先生を中心とする山登りの会であった。

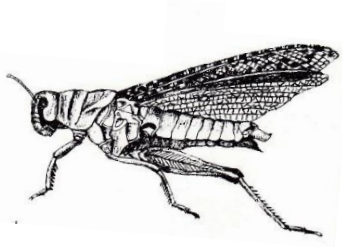
昭和四十六年には海外旅行のお供もした。九月から十月にかけてのアフガニスタン、ネパールへの取材旅行であった。ネパールでは私達がエベレスト街道を、ナムチェバザールを経て三八六七メートルの高地、タンボチェの僧院まで案内した。この旅行は「星と祭り」のなかに記述されている。

井上先生との親交は年々深まり、カエル会の忘年会では生沢朗、山本健吉、東山魁夷はじめ名だたる作家、芸術家、編集者の方々と寛ぎの時を過した。多くのすぐれた知性、教養の士の謦咳に接することができたのは、私の生涯において望外のよろこびであった。

「氷壁」が始まって二十年経った昭和五十一年（'76）の十月二十八日から三十日にかけて、カエル会は穂高へ出かけた。出発の日に先生の文化勲章受賞の発表があり、徳沢での最初の夜は気のおけない仲間のよろこびの会となった。私と長越さんは窓際の席で向いあわせとなった。長越さんは数年前より健康がすぐれず、この夜も随分弱られた印象であった。私達は過ぎた登山界の出来事を静かに話しあった。翌年十月、長越さんは世を去られた。

平成三年（'91）一月二十九日、井上先生が逝去された。二月二十日青山葬儀場で告別式が営まれた。一面の白菊が横短冊型に飾られた、簡素で美しい祭壇がこしらえてあった。正面上部には、眼鏡を手にした先生のにこやかなお顔の写真が置かれていた。式が始り、

式場が一瞬静まったとき、壮年の導師が静かな足どりで、式場を後から前に進み中央の座についた。間をおかず、白い簡素な法衣に袈裟をかけた若い僧の一団が、一列連なりに、音もたてず風を切るような速さであとに続き、前列の僧席についた。このとき私は、これは天平の甍に登場した若い僧の群れだと思った。これこそ井上先生の葬儀に相応しいと思った。



石岡繁雄をおもう

小川 はつこ

私が石岡繁雄さんの名前を知ったのは、著書『石岡繁雄が語る　氷壁・ナイロンザイル事件の真実』からでした。六年前のことです。読み進むほどに、大企業や権威を相手に正義と真理を追求し続けた姿勢に感動が深まってゆきました。そして、この揺るがぬ信念の持ち主についてもっと詳しく知りたくなったのです。その経緯を、「石岡繁雄をおもう」と題してエッセイにしました。五年前のことです。

今になると古い記述や、稚拙な表現が多くあって、掲載はためらわれました。ですが、石岡繁雄ファンの想いを知っていただくのは嬉しいことです。ひょっとすると、彼に関する小さな新しい知識を得てもらえるかもしれません。そう考え、ここに掲載いたします。

石岡繁雄をおもう

小川はつこ

昭和四十五年、私は神戸高校一年生だった。夏休み目前のむせ返るように暑い下校時、異様に大きな荷物を背負って神戸の街中を歩く一団に出会った。道端に寄ってやり過ごしても、せまってくる程のあえぎ。たったいま水をかぶったように、したたり落ちる汗。前のめりになり、重くて頑丈そうな靴を一歩ずつ進めていく行進は、苦行にしか見えなかった。釘付けになっている私に、隣にいた友人が小声で教えてくれた。

「あれは、山岳部。危ない岩登りをやってるらしいよ。山に行かない時は、ああやって訓練しているんだって」

辺りをいっそう蒸し暑い空気に変え、汗の臭いを残して彼らは通り過ぎていった。

それから四十余年が過ぎた今年、私は、そのクラブの創設者とその人生を知ることになる。

＊

昭和三十年一月二十五日生まれの私は、その三十七年前の同じ日に生まれたある男の人生の軌跡に魅せられてしまった。彼の名は、石岡繁雄。私が産声を上げる直前の一月二日、登山用ナイロンザイルの切断による墜落死事故が起きている。その原因をめぐる二十年に及ぶ戦いから、「事故」を「事件」として世に認識させた男である。

登山家石岡繁雄の名を初めて知ったのは、鈴鹿市立図書館に並べられた『石岡繁雄が語る　氷壁・ナイロンザイル事件の真実』と題された一冊の本からであった。私はそれまで、「ザイル事件」という言葉と、小説『氷壁』がそれを素材にしたということは聞き知っていながら、事件そのものについては何も知らずにいた。

事故に遭遇したのが鈴鹿の山岳会であり、墜死を遂げたのは当時三重大学一年生の学生であったことを知り驚いた。石岡繁雄はその学生の実兄であり、戦中から鈴鹿に住んでいる。前述『ナイロンザイル事件の真実』は、ザイル切断原因の真実を追及し続けた石岡の実録記録であった。

事故発生の状況から始まり、原因究明のための実験と証明。メーカーや権威者達を相手に、彼は常に冷静で科学的であり、あきらめない姿勢を貫いている。私の心はすっかり石岡繁雄に惹かれていったが、彼は七

年前になくなっていた。もっと早くに事実を知っていれば、会って話が聞けたのにと自分の無知が悔やまれた。

石岡についてもっと知りたいと思い、四日市、名古屋の大型書店を回ったが、手に入れることができたのは『屏風岩登攀記』のみであった。戦後すぐに、旧制神戸中学校の生徒と共に穂高の屏風岩正面岩壁初完登という快挙をなした時の記録である。私が高一の夏に出会った山岳部の、先輩達の輝かしい歴史である。あとはもう入手困難であることが分かったが、ただ一冊、『ザイルに導かれて・石岡繁雄の半生』だけは鈴鹿国際大学付属図書館に所蔵されていることを知り、さっそく借り出した。

さらに、石岡の次女である石岡あづみさんのホームページから、「ナイロンザイル事件に関わる品を大町山岳博物館に寄贈した」という記事を見つけた。山岳博物館は、大町市の東側にある丘陵地に建つ。その博物館の前に降り立ち、入り口へ続く石の階段と赤茶色の建物を見上げたのは、記事を読んだ一週間後だった。

＊

博物館の一階は登山関係の展示、二階は北アルプスの自然紹介、三階は展望台になっている。受付を済ますと、真っ先に「遭難」コーナーへ進んだ。前穂高東壁で起きた「ナイロンザイル切断事故」に関わる品が展示されているのは、そのコーナーである。中でも、墜死した若山五朗が腰に巻いていたザイルを、私は自分の目で確かめたかった。

五朗が墜落した時の様子をザイルパートナーから聞いた石岡は、ナイロンザイルが岩角に弱いことを確信し、当時勤務していた名古屋大学や自宅の庭での実験により証明した。ところが、世間からは「ザイルがほどけたのではないか」「自分たちの技術的ミスを、ザイルのせいにしている」等の批判が向けられた。さらに、ザイルメーカーと登山界の権威者は、ナイロンザイルの欠陥をごまかす実験を公開したのである。石岡が正しいことを証明するには、五朗の体に巻かれたザイルが証拠となる。果たして、雪解け後に発見された五朗の腰には、墜落当時のままの無惨に切れたザイルが巻かれていたのである。そして、その切断面は、墜落時にショックもなくぷっつり切れたと言うザイルパートナーの話を証明していたのだ。

展示品の中でもひときわ目を惹くオレンジ色のザイルは、五朗と共に半年以上雪の中に埋もれていたものである。近づいてみると色が一部変色している。きっちりと撚られたザイルのねじりはいかにも強そうだ。が、切断面を見ると、恐怖にとらわれた。ザイルはわずか数十センチ伸びてほどけ、最後はまさにぷっつりと終わっている。それはつまり、五朗が五十センチ滑落しただけで突然切れたことを証明しているのだ。

ザイルが切れた岩角に残っていたザイルの繊維や、五朗がはいていたアイゼン、事故直前の写真等も展示されていた。どれも時間と空間を超えて、私を墜落現場へとつれていく。なかでも、心をとらえたのは、ザイルがかかっていた岩場の石膏模型と切断現場の再現実験に用いた岩石であった。現場の岩角と同じ模型を製作した石岡が、ザイルの岩角欠陥を実験証明したものである。科学的な証拠をそろえ真実を追究していった彼の、揺るがぬ信念がこの握り拳四つ程の小さな固まりにこめられているようだ。

この「遭難」コーナーには、次のような紹介パネルが掲げられていた。「…登山では自然が求める厳しいルールが人間を支配し、たった一回の違反が死に結びつくことさえある。…」山では思い上がりや怠慢が事故につながるのは間違いないところであるし、同じコーナーには他の遭難事故関連の展示もあった。しかし、ナイロンザイルが切れたのは、登山者が自然をあなどった結果ではない。

割り切れない思いで、三階の展望台へ上がった。

広いガラス窓いっぱいに北アルプスが広がっている。まだ雪を残した山並みは、窓という額に納められたまさに美しい絵であった。

＊

幼い頃、私は小学校近くの「キチ農場」でよく遊んだ。石薬師にあった農業試験場だが、大人も子どもも「キチ農場」と呼んでいた。陸軍第一気象連隊の跡地であったため、周辺の人々から「基地」農場と呼ばれていたと知ったのは、後のことである。

あの頃は、昼間から酒に酔っぱらっている人をよく見かけた。ある時、酔った老人が道ばたに座りこんで泣き叫んでいるのに出くわした。怖いもの見たさと可哀想に思う気持ちとで、少し離れたところから見ていた。通りかかった大人から、「戦争で息子が死んだ人や

から、見とらんときな」と言われたのが忘れられない。
もはや戦後ではないと言われた時期である。しかし、戦後の復興が進む中、人々の生活はやっと戦争から立ち直り始めてはいても、戦争が残した重荷を引きずるようにして暮らしていた時代だったのだろう。
そんな時代に「山に登る」ことは、どんな意味を持っていたのか。また、被害者の兄である石岡を、原因追及と証明のために二十年戦い続けさせた原動力は何だったのか。
展望台のイスに腰かけ絵のように穏やかな北アルプスを眺めていると、そんな疑問がわいていた。それは、石岡を知るための手がかりになるだろう。

＊

著書の中から、昭和二十年代の石岡と、彼の山岳部に集った若者達の動きを思い返してみた。戦後の貧しく荒廃した時代の若者達が、「山に登る」ことにどんな意義を見いだしていたのかは、そこからうかがい知ることができそうだ。
昭和二十年十月。旧制神戸中学校教諭であった石岡は、山岳部を創設している。戦後の貧しい時期であり装備も満足にそろわない状況を思うと躊躇したであろう。ましてや当時、山に登ることは悠長な遊びと世間からは受け取られ、風当たりも強かったであろう。しかし、暗く、抑圧された時代が終わり、若者達には自由や冒険、自己の力への挑戦にエネルギーを燃やしたい思いがあったにちがいない。
人間を寄せ付けない力で立ちはだかる山、人の心も体もやすらがせる山。柔・剛の両面を持って、山は魅力を放つ。石岡自身、そんな山に見せられてきた人間であるから、若者達の熱い思いが理解できるし、それに答えてやりたい気持ちも強かったにちがいない。自分の母校である八高から、使われていない用具類を譲り受け、自らが部長となって神戸中学校山岳部は生まれた。休日は鈴鹿の山々を歩き、御在所藤内壁を登る。長期休みには信州の山へ出かける。それを繰り返すことで、山の安全と岩登りの技術を着々と身につけさせていった。かくして、創部の翌々年には、それまで前人未踏であった屏風岩初登攀に成功するのである。貧弱な装備を、積み重ねた練習と明るい時代を望むエネルギーがカバーした偉業といえよう。
神戸中学校を卒業した者たちが山登りを続けたいと

いうので、石岡を会長として誕生したのが岩稜会である。山に登る者たちの中ではなかなか有名になり、卒業生以外や県外からの仲間も増えていった。独特のかけ声「あらよー」が聞こえると、他県の山岳会の者にも「岩稜会が登っている」と分かったそうだ。

しかし、その装備たるや貧弱この上ない。テントは陸軍払い下げの巨大な天幕から作った。八方手を尽くしてやっと手に入れたコンロも軍仕様の巨大なもの。靴は地下足袋。それを履いて切り立った岩壁を登る。寝袋は手作り。ある者は、母親の作ってくれた寝袋が大きすぎて、それだけでザックが満杯になったので他の道具類は風呂敷に包んで両手に提げた。

そんな集団を見かけたら、現代ならお笑い番組の収録か何かと勘違いしそうだ。だが、岩稜会の若者たちは至って真面目である。装備に対する羞恥心やひがみなどは一切ない。あるのは、闘志と希望、そして友愛だった。それらが彼らの宝であり、どんな急峻な岩にも立ち向かっていく強力な武器になったといえよう。昭和二十年代、岩稜会はその武器を駆使して、穂高の山々に新しいルートを開いていったのだ。

ともすれば、敗戦による無気力感や荒廃感に支配される世相の中で、若者たちの健全なエネルギーが困難な山登りへの挑戦に向けられた。そこには、意欲や充足感という生きた感動が生まれたであろう。屏風岩初登攀当時、石岡はまだ二十九才であり、彼自身もまた若者であった。

＊

一つ目の疑問に私なりの答えを見つけ、もういちど窓に目をやった。北アルプスは、依然として泰然とかまえている。登山家としての石岡が、山に抱いた期待、恐怖、挫折、満足……、それら全てが一つになって、山の稜線から岩と樹木の斜面、その下の野や川に今も漂っている。そう思われた。

＊

さて、彼を二十年にわたる権力との戦いに突き動かし、あきらめさせなかった原動力は何だろう。二つ目の疑問について考えるには、昭和三十年代以降の彼の活動に手がかりがありそうだ。

昭和三十年の正月。岩稜会は、前穂高東壁に挑んだ。命綱であるザイルにナイロン製を選んだのは、安全性

を考慮しての選択であった。従来の麻製に比べて三倍の強度を持つと保証され、専門家や権威ある山岳雑誌の推薦もあったからだ。ところが、アタックメンバーが体につないだ命綱のザイルは手応えもなく切れ、若山五朗が行方不明となる。

ナイロンザイルが岩角の鋭いエッジに弱いと推測した石岡は、実験によってそれを証明するが、世間では登山における初歩的な技術不足を原因とする声が広まっていく。

そうした中、日本山岳会関西支部長であった大阪大学のS教授は、自分が切断原因の究明を行うと発表する。教授の実験はザイルメーカーの支援を受けて行われ、ナイロンザイルの強度は、実際は麻ザイルの二十分の一しかないことが判明する。

ところが、公開された実験では「前穂高の事故と同一条件でザイルは切断しない」という結果が出る。これにはトリックがあった。公開実験に使用した岩角には、面取りが施されていたのだ。自社製品の欠陥を積極的に隠そうとする企業に、山岳会支部長でもある大学教授が加担したわけである。この公開実験を受けて、山岳雑誌には「ナイロンザイルの安全性が証明された」と掲載された。

山の安全のためにうやむやにはできないという強い思いが、石岡を権威者や大企業に立ち向かわせていくことになる。

自宅の庭に作った装置による実験。発見された五朗の遺体に正しく結ばれていたザイル。ザイル切断の岩角に付着して残っていたザイルの繊維。S教授の実験を手伝った人物から入手したデータ。証明となるあらゆる資料を揃えて、訂正を求めていく。

しかしS教授は、「私の実験は船舶等に使う縄に関するものであり、岩稜会の事故原因を調べるために行ったものではない」と発表し、山岳雑誌においても訂正されないままであった。そのため石岡は、実験や新聞・山岳雑誌への投稿、公開質問状の送付等を長きにわたって続けていくことになる。

昭和四十八年、消費生活用製品安全法が制定され、ザイルの安全基準作成のための実験が石岡らに任された。その結果、昭和五十年、世界初の強制力を持ったザイルの安全基準が制定されることになったのである。石岡の初めの訴えから二十年を経ていた。

石岡が求め続けたのは、真実である。それは、山に

登る者たちの安全を保証するためのものである。だから、事実が負けるわけにはいかないという強い思いがあったのだ。

＊

展望台の椅子から立ち上がり、窓のガラスに顔を近づけた。鋭く緩く、様々な稜線を描いて伸びる北アルプスは、崇高な表情の中にふっと包容力を感じさせる。かと思えば、居丈高になってみせたりもする。石岡が八高、名古屋帝大時代、さらに戦中さえも時間をひねり出しては登った山々だ。

登山家としての彼は自らが岳人として、また山の指導者として、目指すところに向かって自分の持てる知恵や時間を傾けて生きた。内なる充足と自然との融合を求め、欲求に突き動かされるように山に通っている。山にはごまかしも体裁もない。登り来る者の社会的地位にも人間性にも左右されない。山として、岩壁として、毅然と有り続ける。そんな山がつきつける試練に真っ向から向かっていく時の、真摯で緊張感に満ちた時間は、石岡の心をとらえたことだろう。

鈴鹿からここまでの道は、私の娘がまだ子どもだった頃、毎冬スキーに通った道である。中央道梓川のサービスエリアを過ぎれば、豊科インター。そこで高速を降り、雪の道を白馬方面に通ったものだ。今回は、懐かしいそのインター名が消え、「安曇野インター」と改名されていた。今、視野の左方面に広がるのが安曇野。石岡が、愛してやまない山への往復に歩いた地である。岩壁に張り付きながら、彼がはるか眼下に眺めたであろう梓川が蛇行して流れる。山に魅せられた石岡の心を、ふっと解きほぐしたのは険しく厳しい山の裾に広がる安曇野とそこを流れる梓川ではなかったろうか。

そんな想像をした時、「梓」と「あづみ」の名を我が子に付けた石岡の思いが胸に迫ってきた。登山家であり科学者である彼だけを追っていたが、人間石岡を垣間見た気がしたのだ。

石岡への思い入れはさらに深まり、大町山岳博物館を出た。鈴鹿へ向かう車から北アルプスの姿が見えなくなっていくのに、頭の中には、生前会うことのできなかった石岡が現れて消えない。頭の中の石岡の映像は、来るときよりも鮮明で大きくなっていた。科学者の精神で厳しく真理を追究した石岡の中に人間を感じ

たことが、私と彼との距離を近づけたのだろうか。

＊

山岳博物館訪問後、人間としての石岡に思いをはせた。

彼が中学時代に描いた生物スケッチは、実に緻密で博物誌の挿絵のようだ。八高から大学にかけては天体望遠鏡を手作りし、それを使って日食や水星を撮影している。その観測精度は、当時京都大学からのお墨付きを得た程である。屏風岩登攀にあたっては、成功までの四回の失敗の都度、多数の写真をとったり何種類もの地図を作ったりして可能性あるルートをさぐっている。

石岡と自作の天体望遠鏡(1940)

山に居るときも居ないときも、科学的に物事をとらえ困難に立ち向かってきた石岡は、ザイル事件以降もそうあり続けている。それは、彼が取得した数十件の特許が明らかにしてくれる。

例えば、ザイル事件の延長から考案したと思われるロープの切断防止装置や緩衝装置は、登山者の命を守るための発明である。高所作業者の安全のための数々の発明は、そこからさらに発展したものであろう。さらには身体的ハンディを持つ人と介護者のための器具も考え出している。入浴用身体保持具と介護用移動装置がそれである。彼の考案したものは全て、人が安全を確保し、直接に安心を感じ取れるものばかりである。石岡は、他者の安全のために自分が持つ能力を駆使して人生を終えている。

＊

九月、嬉しい事に石岡あづみさんと、前穂高遭難時のザイルパートナーの一人であった澤田栄介さんにお会いする機会を得た。

お二人から伺った「山を愛し、酒を愛し、妻を愛した」石岡にまつわる話は、既知の事柄でも新鮮に聞こえ、未知だった出来事はなおさら私を感激させた。最晩年の様子についてあづみさんが語られた時には、足が震えだした程である。石岡は、足がすっかり弱って

も、最後まで自分の研究所に行きたがったという。妻を亡くした時は、四十九日があける頃まで泣き暮らしたという。すっかり弱くなってからの彼も、魅力ある人間だったのだ。

澤田さんは、その後国立公園レンジャーとして各地の山を回り、八十才の今も山に登っている。

「パートナーの遭難死にあい、自らも凍傷で足の指を失う経験をしながら、なぜ山に？」

勇気を出して尋ねてみた。澤田さんの口をついて出たのは、一言。

「山が好きだから」

そう言って、後は遭難事故後の人生を語られた。山のどういうところが好きなのか、尋ねたかった。ところが、お話を聞いているうちにそんな思いは消えていた。

「山が好きだから」。直接的で素直な言葉だ。概念的なようで、実は何と精神的か。

そうだ、石岡もただひたすら山が好きだったのだ。好きでたまらないから山に登り、山の安全のためにはとことん追及を続けたのだ。石岡の山への情熱に、私は理屈のある理由をほしがっていた。そのために、根っこにある透き通った純真なものに気づかなかったとは。

＊

あづみさん達は、十一月から名古屋大学博物館で開催される企画展の準備に追われている。そこにはザイル事件関連の品々が展示され、石岡の遺品も公開される。期間中、ザイル事件発生のいきさつや石岡繁雄の人となり等についての講演会もある。

そこでまた新たな発見がしたい。もっと石岡繁雄に近づきたいと心待ちにしている。（２０１３年　記）

名古屋大学博物館 第28回企画展（2013/11/5～2014/1/30）のポスター

心の奥底の声ー
真実を守る戦いと、
弱者の幸せを奪う
強者のエゴイズムへの怒りー
を生命の炎に燃やしつづけたい。
昭和五十五年三月

（上写真）多くのマスコミや関係者の目の前で、蒲郡実験の誤りとナイロンザイルの危険性を明快に証明した鈴鹿高専での公開実験（1973）＜本文 33 頁＞
（左写真）石岡のスクラップブックに書き込まれていた言葉（1980）